



## 40周年記念企画

# 私たちがまだ知らない 戦争のこと

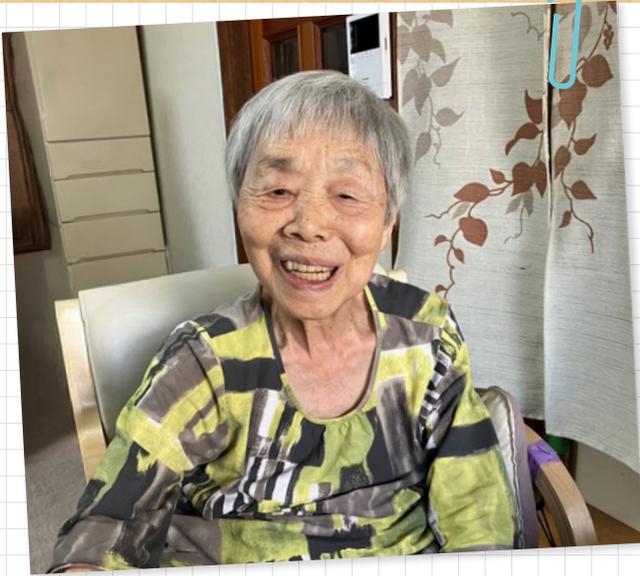
区では、平和都市宣言40周年を迎えるにあたり、新たに戦争体験者の方々からお話を寄せていただきました。これまであまり知られてこなかった体験や、今だからこそ語られた思いを本章では紹介します。一人ひとりの言葉には、戦争の悲惨さと平和を願う強い気持ちがこめられています。新しく知る話から、私たちは過去を学び、平和の大切さをあらためて感じるのではないのでしょうか。



令和6年度長崎派遣の子どもたち



令和7年度広島派遣の子どもたち



## ばくげき き B29爆撃機による空襲で 生活が急変

### 聞き取り

てら お あや こ  
寺尾 綾子さん  
水道町在住  
終戦時：18歳

私は、飲食店が立ち並ぶ神楽坂本多横丁のお菓子屋に生まれました。

7人兄弟の長女で津久戸小学校を卒業したのち、  
東京市立牛込実務女学校（後の都立市ヶ谷商業高  
校）に2年ほど通い、その後、17歳から昭和金属  
工業株式会社で事務の仕事をしていました。

私たち家族の生活の様子が急変したのは、B29  
爆撃機による東京への本格的な空襲が始まった頃  
です。母や4人の妹は、空襲から逃れるために父  
の実家があった石川県羽咋郡に疎開しましたが、  
私は仕事があったので、父や兄、祖母とともに疎  
開せず、神楽坂の家に残りました。

その頃の思い出といえば、やはり雨のように降  
る爆弾や焼夷弾による激しい空襲です。爆撃を避  
けるため、近所の家は明かりを制限したり、窓ガ  
ラスに紙を貼ったり不便で不安な生活を余儀なく  
されました。空襲警報のサイレンが鳴った時は、  
火の粉が舞う中、着の身着のまま町会で1~2カ  
所の防空壕に逃げ込み、10人くらい入れればいっ  
ぱいになるくらいの四角い穴に沢山の方たちと身  
を寄せました。狭い空間に多くの人が密集し、爆

弾が地面に落ちる衝撃と轟音の中恐怖と不安で身  
動きが取れない状態でした。横を見ると既に亡く  
なった方が居たこともありました。

大空襲で神楽坂の家が焼かれた時は、必死で  
80歳を過ぎた祖母の手を引きながら、やっとの  
思いで靖国神社まで逃げたことを思い出します。  
怖かったし非常に大変でした。足も辛かっただろ  
うに祖母もよく歩いてくれたと思います。沢山の  
人たちと、やっと神社の境内に逃げ込んだ時は、  
ああ、家族がバラバラにならなくて済んだと本当  
に安堵したのを覚えています。

戦争中のことを聞かれてもあまり思い出せない。  
いつも黒い爆弾に怯え、逃げていたことが思い出  
されるくらいで、今でも思い出すことができるの  
は戦後、疎開先での生活や父が東京にバラックを  
建て、再び東京で生活ができてからの思い出です。

戦争は人の記憶を消してあいまいにしまう  
ほど程、強い影響があります。世界では戦争が今も行  
われているが、決して戦争を再び起こしてはなら  
ないと強く思います。



## 戦中を新大久保で生きて

### 寄稿

久保田 幸子さん  
東久留米市南町在住  
終戦時：17歳

昭和20年4月1日に新大久保の叔母の家に強制疎開で新橋から移り住んだ私（現高校2年）、中学2年の弟、歩行困難の母は、14日、第一次山の手大空襲に遭う。母は叔母と先行し家に水をかけていると「何してる誰もいないぞ」とどなられ、その人と共に明治通りに出ると新宿方面は炎に包まれ池袋への道もすぐ息苦しくなって道の端の雨水弁に鼻をつけて寝て地下の空気を吸っていると突然キャピラの音がして駅の方から戦車が現れた。呆然としてここは戦場なのだとふるえていた。叔母は駅に近い所に空家を見つけ移り住んだが、5月25日には第二次山の手大空襲を迎えることになる。焼跡からは伊勢丹がはっきりと見え他は何もなかった。戸山ヶ原の対空砲で火を吹いたB29に歓声を上げたが、突然行き先をこちらに向けて降下し同時にある限りの焼夷弾をばらまいた。空一面は弾の下についた赤い火に包まれ一定の落下後、1発は30数発に分離し、空は隙間なく赤に染まった。オーバーを水にしっかりつけて風上と信じる焼け跡へと全力で走った。なぜか弾は走ったすぐ後ろに落ちる。赤ちゃんを背負った女の人を先に見た時、突然その人は飛ばされるように横に倒れた。私は速度をゆるめることもなくその横を走りぬけ焼け跡の素掘りの塚に飛び込むと土の壁に胸を寄せ焼トタンを引き寄せ隙間から近くに落

下する焼夷弾の姿を追った。

時が過ぎすべての物音が消え朝の気配がして塚を出て井戸に向かった。痛む顔と手を水につけていると薄暗い中からゾンビのような人が現れ井戸水に頭をつけると座り込んだ。次々と人は現れたが生きた喜びを語る人等なく水を被るだけだった。戸山ヶ原へと逃げた母や叔母と再会でき、駅に近い焼け残った家の一間での夜となった。何一つ持ち出すことができず焼け跡の残るオーバーを抱える私を叔母は冷たい目で見た。私はその夜眠ることはなかった。あんな時だったからこそ赤ちゃんだけでも抱いて逃げるべきなのにそれを無視した私は人間は半分で半分は鬼でないか。終戦の日、国が掲げた東洋平和・五族協和を自分の命として生きた私の命もこの時尽きたと思えた。軍情報で東京に原爆がと言われた終戦3日前の日も平然と出勤した私だった。終戦の日の夜、家に帰りすがりつくような母と弟の目を見た時、私は考える人間を止め一匹の働き蜂となることにきめた。この人たちを生かすのは私しかいない。考えればずっとたになる心は捨てるが、いつか自分の足でしっかり立っていると思える日がきたらどんなに辛くても過去をしっかりと振り返り身近な人たちと共に幸せの夢を目指す人になりたい。私も人間だと心に誓った。

寄稿

葛岡 信男さん  
世田谷区東玉川在住  
終戦時：13歳

## 私の戦時中における被災体験

昭和20年、住所は東京市牛込区若宮町、旧制  
中学2年生の時だった。

5月25日の夜、今までの空襲で焼け残った地区  
をB29が襲い、全部焼いた。

近くに油脂焼夷弾の直撃を受けた家が2～3軒  
あったが不発弾で、何軒かの庭にもやはり不発弾  
が刺さっていた。停電していたが屋外は真昼のよ  
うな明るさ。幸いなことに外堀通りへの坂道は火  
の手は見えないので急ぐ。家の周りは無風状態に  
近い。他には人影は全くなかった。

私は数日前までは軍事教練のため、御殿場（今  
の東富士演習場）で野外訓練を行っており、よく  
帰宅が間に合ったものと思った。

逃げ場はお堀端以外にないので駆け下る。外堀  
通りは火の通り道。折角持ち出した傘を広げ走っ  
て水辺へ。おかげで傘は焼けて骨だけに。

神楽坂の方を見ると、ちょうど坂の一番下の角、  
赤城屋という足袋屋が燃え始めており、向かい側  
の神楽坂警察署に火の手はなかった。

お堀端から見回すと火が、西は市ヶ谷方面の新  
見附通りまで、北は坂の上まで広がった煙で見え  
ない。東は神楽坂下へ、南は麴町全体がものすご  
い勢いで燃え上がっており、屋根瓦の燃え落ちる  
音が全体から響き渡っていたのが今でも耳の底に  
消えずにある。

翌日、見渡す限り灰灰灰で、見える残骸はコン  
クリートの土台、焼けたトタン、配管類の金属棒  
と比較的大きな樹の根本辺りだけで煙もない。と

もかく防空壕が心配なので見に行った。防空壕か  
ら煙が出ていたので、目の前の若宮八幡神社にあ  
る手押しポンプで井戸水を必死になってかけ、お  
陰で焼損は僅かで済み助かった。今考えてみると、  
途中の道はものすごく熱かったのを思い出す。

当夜はとりあえず近くの物理学校（今の東京理  
科大学）へ行き、その後津久戸小学校に移った。  
その間、壕舎では仕方ないので、掘って立て小屋を  
建てることに。我が家は幸い万年堀が残っており  
役に立った。材料は防空壕に使用していた柱や板、  
トタン。トタンの屋根には石を重しに。

落ち着いてから周囲を見回すと本当に何もなく、  
本郷の帝大安田講堂が丸見えだった。周りには誰  
もいないし、終戦日を過ぎてからも小屋は我々の  
他にはゼロだった。

両親と5人の子どもでの生活。全く食べるもの  
がないのでアカザ、ヤマゴボウ等々雑草を煮出し  
灰汁を抜いて、或いはさつま芋の葉や茎、何でも  
食べた。栄養失調で、当時3歳の末の弟を失う。  
手製の棺桶、リヤカーを借り焼場へ灰の道を父と  
延々と歩く。私自身も死の一步手前まで。

軍事教練中の空腹感、焼跡で雑草しか食べ物か  
ない、栄養失調で歩くこともできない状態、不発  
弾は燃料に、庭に「陸軍〇〇部隊陣地構築用地」  
の立札、色々思い出す。

食料等の買い出しのため、煙にむせながら機関  
車の窓枠にしがみついたり連結器の上に乗ったり、  
よく生きてこれたものだ。



## 忘れられない記憶 「東京大空襲」

### 聞き取り

おおまき まさこ  
大巻 正子さん  
北新宿三丁目在住  
終戦時：8歳

私は現在の<sup>きたしんじゅく</sup>北新宿3丁目で生まれ育ち、今もここで暮らし続けています。

昭和20年、小学2年生の時、周りの子どもたちは、低学年が群馬県の<sup>あんなが</sup>安中へ、高学年が<sup>くさつ</sup>草津へ<sup>がく</sup>学童疎開に行っていましたが、親元を離れて暮らすことを心配した父が、私を東京に残すことに決めました。

3月10日、東京大空襲。北新宿の<sup>きたしんじゅく</sup>辺りも被害に遭いましたが、幸い我が家の周りは爆弾が落とされず無事でした。

ところが数日後、家の近くの市場が攻撃され、線路を越えてこちらまで火が襲ってきました。町が火に包まれる中、祖母と足の悪い母をリヤカーに乗せ、父が引くリヤカーを私が後ろから押し、逃げて回りました。周りの住民たちと一緒に、<sup>よろい</sup>鎧神社の近くのガードに逃げ込みましたが、敵機が上の方から急に降りてきて、ガードを狙って爆撃してきました。私たちはガードの奥の方に入っていたので助かりましたが、ガードの手前の人々は次々と撃たれ、亡くなっていきました。撃たれて横たわる母親に小さな子どもが、亡くなっていることがまだわからなかったのか、「お母さん、お母さん」と呼んでいる姿は忘れられません。

そこから近所の<sup>えんしやうじ</sup>圓照寺に避難しましたが、<sup>よろいじん</sup>鎧神

<sup>じゃ</sup>社が燃えて、小学校が燃えて、小学校の裏手にある<sup>えんしやうじ</sup>圓照寺に倒れてきました。必死で目の前の「学友会」という日本語学校に逃げ、「学友会」の周りに生い茂る木々のおかげで火から逃れることができました。

<sup>きたしんじゅく</sup>北新宿の町は一瞬で焼け野原に変わりました。辺り一帯の建物は焼け落ち、<sup>おおくぼ</sup>大久保駅から富士山が見えたほどです。

それからしばらく、焼け野原の中、<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕で暮らしていました。自分たちで掘った、<sup>わづ</sup>僅か四畳半ほどの小さな<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕で、両親、祖母と生活しました。その後、焼け跡から材木を集めて、父がバラックを建てました。このバラックで終戦のラジオ放送を聞いたことを覚えています。

食料もなかったので、焼けた土地を耕し、かぼちゃやとうもろこしを植えて食べていました。バラックの周りにかぼちゃが山のようにできたので、それを蒸してご飯代わりに、きな粉をつけて食べたり、<sup>しやうゆ</sup>醤油で煮たりとか。当時のかぼちゃはザクザクしていて、今みたいに<sup>おい</sup>美味しくなかったのです。もう朝から晩までかぼちゃだったので、それから何年間もかぼちゃを見るとぞっとしていました。お米が配給でもらえるようになって、量が足りないのので、さつまいもなどを入れてかさ増し

して食べていましたね。父は埼玉の方へ行って、着物とお米を交換したりもしました。お風呂は近所のお豆腐屋さんにあったドラム缶で、近所の人とお湯を沸かして入りました。

私の小学校は焼けてしまったので、焼けずに残った別の小学校に通ったり、プールの中で勉強することもありました。満身に勉強もできない環境だったので、私の小学校3・4年生はぽっかりと抜けているような感じで、その後ずいぶんと苦労しました。そのうち、長野県の伊那<sup>いな</sup>から材木の寄付があり、職員室と教室が3部屋ほどでき、午前・午後に分かれて勉強ができるようになりま

した。

戦後1年ほどして給食が始まりましたが、栄養士さんたちも少なかったので、父母が調理の手伝いに行っていました。「鶏だ鶏だ」と言われて食べたお肉が慣れない味がしたので、給食室に見に行ったらカエルのお肉だった、なんてこともありました。

今の人は食べ物に不自由するということはないでしょう。そのありがたみっていうのをしっかりと感じてほしいですね。それから、今を生きる子どもたちには、戦争のない世の中で、自由にのびのびと羽ばたいてほしいなと思います。

空襲

父の出征が決まり、写真館で撮影した家族写真



## わたしの戦争体験

寄稿

まるやま じゆんこ  
丸山 順子さん  
中井二丁目在住  
終戦時：7歳

小学1年の時、父が出征し、中井<sup>なかい</sup>の家に母と二人になり母の故郷大阪へ転居しました。大阪では登校すれば空襲警報<sup>くうしゅうけいほう</sup>が鳴って帰宅する、の繰返しで祖父母の住む富山市へ1945年夏に疎開<sup>そかい</sup>しました。

富山行きの列車は凄まじく混み、私は4人掛けの座席に座った大人の足の間にしゃがんでいました。トイレも人がいっぱいので駅で停車すると大人たちが私を抱えリレーのようにして窓からおろしてくれました。用を足すと窓から引き上げてもら

い、大人の足の間でまた身を屈めて富山までの一晩を過ごしました。

その頃、全国的に空襲があり「富山市も空襲がくるのでは」と噂があり、8月2日に私たちは富山市内から滑川へ転居の予定でした。前夜、母と隣組の人たちが防空壕で貴重な配給のマッチを一本一本分け終わり防空壕を出ると空襲警報が鳴っていました。母と祖父母と私は神通川へは逃げ遅れ、小さな川に逃げました。神通川に逃げた人々は攻撃され大勢亡くなったそうです。「伏せろ！動くと見つかる！」と怒られ、真夏なのに川は冷たく私の胸まであり凍えて浸っていました。辺りは野原で遠くに建物があり人影が見えた瞬間火の手があがりました。爆撃されたのです。午前3時半か4時頃、米軍機は去りました。

祖母は市内でたくさん人が亡くなっているのを見たそうです。家に戻ると家屋は焼け、毛糸玉が炭化したままの形で残っていました。引越しを頼んだ人たちに食べてもらおうと浅めの井戸に入れた木蓋をした釜のお米は炭のように真っ黒でした。

食べ物は他になくそのお米で私たちはしのぎました。辺り一帯焼けて煙が燻っていました。富山市唯一の3階建てのデパートはまだ煙がでていました。

昨夜背負った荷物だけで母と祖父母と徒歩で滑川へ向かいました。道中は人でいっぱいです。偶然会った知人がくださった真白なおにぎりのおいしさは今も忘れられません。

父は1946年5月、満州から実家の兵庫県甲子園に帰還。自分の家と隣家だけ焼けずに残っていたそうです。父は戦争前に勤めていた会社に通うため母と中井の家に戻りました。疎開する時、貸したのを八畳間だけ空けてもらいました。

大阪商船に定年まで勤めた祖父は戦後、疎開先で亡くなりました。私は小学5年の時、祖母と東京に戻りました。

兵庫県に住んでいた父方の祖父は8月6日防空壕を出たとき米軍に撃たれ即死、祖母はその時、撃たれた右手が亡くなるまでずっと不自由でした。





4歳の僕、セーラー服姿

## キャンデーの思い出

寄稿

もりた ちあき  
森田 千秋さん細工町在住  
終戦時：7歳

昭和20年6月5日、当時、京都府綴喜郡つづきぐんにあった青谷国民学校（小学校）の2年生だった僕は体調を崩し、家でごろごろしていた。朝早く、母の「チイちゃん、チイちゃん」と呼ぶ大声に、何かと表に飛び出した。抜けるような青空に、アメリカの爆撃機B29が白煙を吐きながら頭上を旋回している。その後ろを親鳥を小鳥が追うように「赤とんぼ」（九三式中間練習機）が呑気に飛んでいる。B29は何回も村の上を旋回していたが、そのうちパッパッと落下傘が開いた。「赤とんぼ」の操縦席の兵隊さんが下界の僕たちに手を振っている。乗り出している顔まではっきりと見えた（ように思った）。

被弾したB29が京都の南部、青谷村あおだにむら（現・城陽市）の水の干上がった白地の木津川きづがわに滑走しようとしていたのか、墜落して大きな炎を上げた。墜落現場を見に行きたかったが大人たちに「米兵がおるから行ったらあかん。家に入れ。」と止められた。

翌日、夜が明けるとともに僕は河原に走った。まだうっすら熱さの残る焼け残った機体の中で赤く丸い缶々を見つけた。中には少し溶けたキャンディーが詰まっていた。その旨かったこと。「アメリカにはこんな旨いもんがあるのか」。88年の生涯の中で最高の味であり、今も舌の先にその味は残っており、思う度に涎が出る。

あのキャンディーを超える味を求めて今も僕はさまよっている。

あの折、落下傘で降下した米兵は、村の男たちに魚を刺すヤスで刺殺されたとも重傷を負ったとも聞いた。「米兵は鬼畜だ」と洗脳された男たち。家族を守るためにしたことかもしれないけれど。

一方、心優しい村人は「亡くなれば敵も味方もない」と墜落死した5人の米兵を弔った。戦時下に敵兵を弔うことは非難を浴びかねない行為だったろうに。その位牌が墜落地近くの深廣寺じんこうじに今も「B29搭乗五勇士 英霊」として祭られている。



## 東京大空襲 5月25日

### 寄稿

あまの たけこ  
天野 竹子さん  
鎌倉市寺分在住  
終戦時：6歳

昭和15年の頃から私は旧淀橋区十二社池の上のバス停から少し上った所の住宅地に住むことになった。16年、17年頃はそれ程戦争の影響も感じられず、配給制は始まっていたが、たまに伊勢丹へ行って賑やかな様子だった。19年に幼稚園に入園したが、その年の11月には休園となった。お菓子も無くなり薬局へ行ってオブラートを買ってお菓子の代わりに一枚ずつ食べた。美味しかった。

空には敵機が飛来するようになり、父との連絡も途絶えたように記憶しています。家の前には防火用水という1m四方のコンクリート製の桶が全戸に配備され、いざ空襲となればそこから水を汲みバケツリレーをして消火する訓練も行われた。また建物疎開と言って空き家になっている家を所どころ間引くように取り壊すということも行われた。

3月10日には下町が空襲され、深川に住む親類が突然我が家に現れて、着ている服はあちこち焦げて煙が立ちのぼっており、顔は真っ黒で眼は虚空を見るようにギョロギョロし、ものも言わずに玄関に倒れこんだ。二、三日寝てたが母が洗濯したボロボロの服をまた着て深川へ戻っていった。その姿を見送りながら大丈夫だろうかとても心配だった。

そうして4月1日になり私は淀橋第六尋常小学校へ入学した。学校へ行くと生徒は一人もおらず日直の職員が二、三人いて、「今生徒は皆集団疎開に行っていて誰もいないんですよ」と言われた。何か月か前に私にも集団疎開に連れて行けますよとお誘いがあった。しかし母は「死なばもろともです」と言ってお断りをしていた。母は入学の手続きをし、帰ろうとしたが、何かつまらなくて私は運動場へ行き朝礼の時に校長先生が上がる台に無断で上がって体操の真似をした。

5月25日の夜、空襲警報が鳴り渡った。私と母、祖母は（父は軍属として満州に渡っており）三人で暮らしていた。逃げないといけないと母は言ってすぐ支度を始めた。わずかな持ち出し用の荷物をたすき掛けにして縛り、タオルと腰ひもを何本か持ち出し、タオルは水に浸けて、腰ひもは繋いで三人の体を繋ぎ、ぐしょぐしょのタオルはそのままそれぞれが持ち、口と鼻にあてがって手を繋いで家を出た。二か月程前に母は六桜社の横の家を「この家は行き止まりだから逃げられない」と関東高等女学校の門の真ん前に引越していた。ちょうどお隣の家族も出てこられたので、一緒に行きましょうと言って走り出した。あちこち曲がって下の道に出て広い通りに出た。通りには商店が並んでいて、ラジオの店から男の人が出てき

て、手に大きな最新式のラジオを掲げて「皆さん、これを持って行ってください。差し上げます」と叫んでいた。一人の若者がそれを渡されて走っていった。程なく行く手にお隣のおじさんの姿が見えた。お隣の家族は「お父さん」と叫んで駆け出した。おじさんも気が付いて両者が触れ合うかと思っただ瞬間その真ん中に焼夷弾が落ちた。ああ一と叫んだが次々と降りかかる焼夷弾に追われて必死で走った。

暫く行くと大きなお屋敷が立ち並んでいる一角があった。通りに面した一軒の屋敷には二、三人の男の人が立っていて「皆さん、この家は憲兵が守っているので安全です。どうぞ休んで行ってください」と逃げる人たちに声をかけていた。それを聞いた途端私は一度に疲れを覚えて「お母ちゃん休もうよ、もう走れないよ」と母に訴えた。祖母も「私ももう歩けない」と言ったので母も「じゃあ少し休ませてもらおうか」と玄関の中へ入った。入ってみるともう人で溢れかえっており家の人に「悪いけどもういっぱいなので他へ行ってください」と言われたが一度気を緩めてしまった私たちはもう動くこともできず「隅っこでいいですから少しの間座らせてください」と頼んだ。そばの人たちも詰め合わせて隙間を作ってくれて座らせてもらった。人々に埋め尽くされた大きな部屋が続く。庭には芝生が敷き詰められていた。すると家の人が庭に出てスコップを持って掘り出した。何をしているのだろうと見ていると掘った穴から壺のような物を取り出してふたを開け細い棒のような物をつっ込んでいるかと思えば箸に水あめが巻き取られていた。それをいくつか持って子どもたちに配ってくださった。私もいただいて口に入れたがそれはそれは甘くて夢のような味だった。

空襲は続いており大きな音を立てて周りの建物に焼夷弾が落ちていた。隣の屋敷や向こうの屋敷に次々と落下して大きな音とともに火の粉が吹き上がって炎が燃え立ちだんだん黒く骨組みが浮か

び上がってくるとドーンという大きな音とともに家が倒れた。物凄い火の粉と炎の狂宴で「きれいなえ」と私は言ったのを覚えている。母が「まあこの子は」と言った。

白々と夜が明けてB29も帰って行き、強運にも私たちの上には焼夷弾は落ちなかった。高揚する気持ちを抱えながら家の人に礼を言って恐る恐る外に出て道に戻り始めた。振り返ってみると門柱に山ノ内という表札が掛かっていた。道の両側には帯のように沢山の死体が重なり合って隙間なく続いていた。道の真ん中は時々車が走っていた。私は足の踏み場もなく遺体を踏まないように気を付けながら一所懸命に歩いた。家のあった所につくと家は影も形もなく瓦礫が散らばっていた。母は防空壕の所へ行き何枚かの皿や茶わんを、持ち出してきた袋に入れた。台所のあたりには真っ黒な炭となったご飯が入った釜が転がっていた。前に住んでいた六桜社の塀の横の家に行ってみると燃え残った瓦礫が散らばっているだけだった。驚いたのは家の前に置かれていた防火用水の桶に何人も逆様に突き刺さっていた。衣服は着ていなかった。両足を天に向けて突き立てその体はパンパンに腫れ上がっていた。余りにも異様な姿に声もなく立ち竦んでいたが「小学校に集まってください」という声が聞こえて小学校へ向かった。

小学校もまた避難民でいっぱいだった。隣の人たちはどうしたかと探したが見当たらなかった。夕方になって四、五人の、頭を白い包帯でぐるぐる巻きにした人たちが入って来た。異様な姿に皆注目したがよく見ると隣の人たちだった。あー良かった、お婆さんの背中に負われている赤ちゃんまで痛々しく頭に包帯が巻かれていたが本当に良かったと思った。その時から何日か学校に寝泊まりしたと思うが記憶に残っていない。家が燃え上がるのを見ても死体の山を見ても感情がマヒしているような感覚だったがやっと心を取り戻したように感じた。

その後私たちは被災していない親戚の所に二日三日と身を寄せながら最後は母方の祖父を頼って大阪に行きました。父は20年の暮れに帰還し私たちはそのまま大阪に<sup>とど</sup>留まり、私は二十歳で結婚し二女一男をもうけ孫八人に恵まれました。ひ孫にも会えて有難いことだと思っております。あの戦火の中私たち三人は怪我一つ火傷一つませんでした。母の言う観音様のお陰かもしれません。先月六桜社のあたり<sup>しんじゅくちゅうおうこうえん</sup>新宿中央公園に行ってきました。熊野神社に詣でて空襲を生き残り80年無事に過ごせたことを深く感謝してまいりました。



新宿中央公園内写真工業発祥の地にて

山ノ内様にはお礼も申し上げられずに心苦しく思っておりました。この文を区に納めることで感謝のしるしとさせていただきます。

空襲



## たかまつし 高松市(香川県)の空襲の時

寄稿

くわじま ひろたけ  
桑島 裕武さん  
戸山三丁目在住  
終戦時：6歳

昭和20年7月4日、当時国民学校1年生（6歳）の私は市の中心部より約4km離れた所に住んでいた。その日の夕方空から短冊状の銀紙が落ちてきたので拾おうとしたら憲兵に怒られた（通信妨害<sup>ため</sup>の為か）。

夜になったら急に市内の方が明るくなり、続いて空襲警報<sup>くうしゅうけいほう</sup>がなった。市内の方では爆撃機<sup>ぼくげきき</sup>により焼夷弾<sup>しょういだん</sup>が投下されていた。何時間も火の玉が空より落下し、地上では火災が発生していた。私たち子どもは田圃<sup>たんぼ</sup>の用水路の中に入り、防空頭巾をかぶり空襲が終わるまで避難していた。

翌朝市内の方より戦闘機<sup>せんとうき</sup>が機銃掃射<sup>きじゅうそうしゃ</sup>しながら自分たちの方に飛んできた。低空飛行のため操縦士の顔がはっきり見えた。怖かった。その後母が長男である私をつれて、市内に住んでいる親戚の安否を確認するため歩いて市内まで行った。街は焼け野原で水道管が破裂し水が噴き出したり、また所々でお腹<sup>なか</sup>の膨れた遺体が横たわっていた。

このような光景を見て大変衝撃を受けた。戦争は2度としてはいけないと思った。今でも世界各地で紛争が起こっている。

早く世界が平和になることを祈っています。



## 太平洋戦争時代の記憶

### 寄稿

さきばら まさよし  
 榊原 正善さん  
 原町二丁目在住  
 終戦時：6歳

私は昭和14年7月生まれ。物心が付いた頃には、戦争は既に始まっていたが平穏な環境だった。父が軍関係者であったので借行社住宅に住んでいた。

周囲には、護国寺や陸軍墓地（今は共同墓地）があり、その地で遊び、春にはツクシンゴ取りをしたもんだった（今の、文京区小石川地域）。

近くには、青柳国民学校（今の青柳小学校）や豊山中学（今の日本大学豊山高等学校・中学校）があり、国民学校には親しくしてくれた数歳年上の薫チャンが通っていたが、やがては、反戦運動に身を投じ二度と会うことができなくなった。とても寂しかった。豊山中学は、陸軍の兵の養成教育も行われており、勇ましい体操や軍歌調の歌声も流れてた。「月月火水木金金」や「マッカーサーを地獄へ逆落し」などの歌。

やがて、米軍の空襲が始まり、下町、神田など家屋の密集地域は爆撃でかなりの被害が出だしたと聞いた。B29爆撃機の編隊が通過していくのも見た。青空の中、豆つぶほどの編隊が飛来したが、日本軍の迎撃はなく、やがて地上から高射砲の一斉射撃が始まり白煙が空中に広がった。数十分で収まったが撃墜された敵機はなかった。ある夜、警戒警報のサイレンが鳴り、引き続き空襲警報の

サイレンが吹鳴するや、一瞬夜空に大閃光がひろがり、大音響と地揺れが生じた。近くに爆弾が投下された。大急ぎで家から飛び出し防空壕に駆け込んだ。この時は、この1発のみで我が家は無事であって安堵した。

この状況下、我々子どもは疎開することとなり、父の実家がある、久留米市に移り住んだ。東京・久留米間を30時間ぐらいかけ列車で移動した。米軍機が列車に機銃射撃をしてくることがあると聞いていたが、幸い無事に目的地に行きつけた。初めての地方都市住まいであったが、爆撃などの気配はなく、暫くは平穏な日々を過ごしえた。（昭和20年5月頃）

しかし、この地にも米軍の爆撃が始まった。ある日の午前だったが既述の米軍機編隊が高上空に飛来し、焼夷弾を次々に落下しだした。実家周辺は家が密集していたので焼失は明らかなので、近隣住民と共に空き地のある方に逃げた。ほとんどの人が防火頭巾をかぶって小走りでキノミキノママ状態で2～3列縦隊で（自然の流れ）進んだ。老人、子どもも居たが互いに助け合っていたと思う。30分ぐら移動して、やっと農地帯に辿りつき、筑後川の支流、本流域へと移行したのだった。一帯には、多くの人々が来ており、皆不安そ

うだった。中には川に身を潜めようとしている人も居た。米軍の爆撃は、住民への攻撃はなく、家屋のみの焼失を目標にしていると思えた。数時間後には落ち着き、親族は被災を免れた家に集まり、集団生活に入った。そこで、暫くして終戦を迎えたのだった。

翌年に、小学校に入学した。戦後、最も苦労したのは食料不足だった。当時、配給制度がとられ、

麦やサツマイモが配られたが米のご飯等は食べられなかった。学校では、先生の引率で野原で食べられそうな雑草（ヨモギなど）を摘んで、役所と思える機関が乾燥し乾パンに仕上げて配ってくれた。小片を口にしたが、美味しいと感じた。こんな子ども時代だったが、皆よく頑張ったなと思っている。

空襲

## サイレンの音

寄稿

た だ ま さ こ  
多田 昌子さん  
山吹町在住  
終戦時：6歳

終戦も間近の昭和20年、わが家は向島に住んでいた。東京の街は荒んでいて昼夜分かたず空襲警報のサイレンが暗く低く鳴りひびき時をおかずB29からの焼夷弾の襲撃が間断なく夕立のように無差別に降り落ちてくる毎日だった。家に残された母と子どもたちはどこへも逃げることもできずただあわてふためき、二階に上り階下に降りることを繰り返す。

6歳の私は米の袋の入ったリュックをかつがされていたことを覚えている。

ある日、家の前が突然真っ赤な炎に覆われ外から父が飛びこんで来て部屋のタタミを2枚、3枚と引きはがし玄関の内側へ立てかけている。赤い炎を背に影絵のように必死に動きまわる父のすがすがが目にやきついている。

あとから聞いた話によるとその時は町内の世話役だったこともあり被災された人々を助けるために奔走していたのだ。

不安な日々であっても食べることは止めることはできない。母が一升びんに玄米を入れて繰り返し棒で突いていた姿。食料の配給といっても各戸一升ほどの豆の日。またある日は干しいもが少々配られる。田舎へ米を買い出しに行けば帰りの電車でやみ米の摘発といって没収される。わざわざ帰りをねらって摘発されたあの米はどこへ行ったのだろう。

いよいよ戦火もはげしくなつてわが家も疎開をすることになった。東北の母の里を頼って母と子どもたちが第一陣。出発のため上野駅に向かう。上野駅はうす暗く駅構内を人々が埋め尽くしてい

る様を言葉もなく6歳の私は眺めていた。黒い影が重なり合ってノロノロと右へ左へ進むともなくうごめいている。

熱のある姉は荷物の上に覆い被<sup>かぶ</sup>さって苦しそう

だ。母は小声で心配そうに声をかけている。その姉も当時、流行<sup>はや</sup>っていた結核で死んだ。貧しくらしの中でこれという医療も受けられず18歳の命だった。

空襲

## 戦争中の思い出

聞き取り

ふくなが たかこ  
福永 尚子さん  
舟町在住  
終戦時：6歳

私は、当時は新潟<sup>たかだし</sup>県高田市（現在の<sup>じょうえつし</sup>上越市）に住んでいました。四谷には昭和39年から住んでいます。

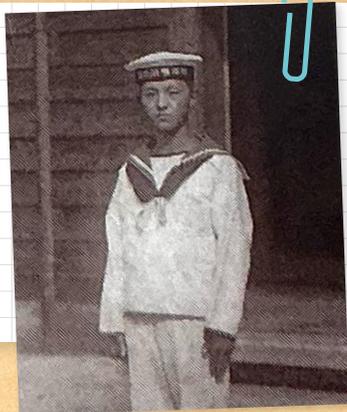
戦争中の思い出は、幼稚園から小学生の時にあります。特に、長岡<sup>ながおか</sup>空襲が大規模な空襲だったと思います。空襲警報<sup>くうしゅうけいほう</sup>のサイレンが鳴ると裏庭<sup>ぼう</sup>の防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>に避難しました。親に連れられて防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>に入りましたが、ただわんわんと泣いていた記憶が強く残っています。夜に暗い中で防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>への階段を降りながら、飛行機の強いブーンという音に驚いていました。日常生活も、電球に黒い傘状の覆いをかけて過ごしていました。空襲が始まると、お巡り<sup>まわ</sup>さんが町内を周り、大人からは騒ぐなと言われました。空襲が「解除」になると、親から、「今のうちに寝なさい」と言われましたが、眠れませんでした。私は四人兄弟なのですが、兄弟はぐっすり寝ているのに、なかなか眠れず、どうしてなのかわからず、とても切なかったですね。

小学校には、東京から疎開<sup>そかい</sup>してきた小学生が、1クラスに3～5名来ていました。私にとっては、普通の生活をしているので、東京が大変なので来たんだと思っていました。当時は学童疎開<sup>がくどうそかい</sup>のことは理解できませんでした。服は着物、いわゆる「もんぺ」姿でした。大人も同じで、上は作務衣<sup>さむえ</sup>のような姿の人もいました。食料も、戦後すぐは、果物や米はなく、さつまいもを食べていました。家業で商売をしていましたが、食料難だったと思います。

終戦後に、まだ20代だったところが亡くなりました。港まであと50mのところまで来た時に引揚船が爆発したそうです。その話を祖母から聞きました。せっかく戦争から生き延びたのにと。本当に悲しいことです。

このような経験をしてきて、色々大変なこともありましたが、今の穏やかな生活がとてもありがたいです。

寄稿

たかまぎ のぶよし  
高杉 信美さん  
終戦時：18歳

## 戦争実録についての話

突如として担任の先生から海軍に志願することを勧められたことは、私にとって大変な出来事だった。その時、生まれて初めて自分の死について、命について考えさせられた。玄関の前で母の見送りだけで、奉公袋ほうこうぶくろ一つ持ち、手を振って出そうな涙を耐えながら別れた。

海軍入団後、新兵教育をうけ、「大東亜戦争は長期の戦いであって、米英を撃滅し、世界の平和を確立するには直接その後継者たる者の力に待つこと大なるものがある。しからば日本海軍50年の伝統的精神が海軍魂となったのである」と、学んだ。

我々が入団したときの十一分隊の分隊長が、戦艦「大和」の副砲長であったことを知った。分隊長の手記では、『大和は沈まず、沈めてはならず』私はそばにいる指揮所員に『死を急いではならない。浮いているものがあつたら何でもよいからつかまえてじっとしていることだ。絶対に一人になつてはならない……』と重い口を開いていった。何メートル深く、何分間潜ったかわからない。真っ暗だった』とある。

### サイパンでの飢餓について

内地からの輸送はほとんどなく、食事も六部食、五部食と減っていった。兵隊たちは疲労が体にこたえるようになり、体力の衰えを見せていった。でも兵隊たちは生きるための必死の努力をしていた。自給自足の食糧確保のため密林の開墾が始

まった。このころになると、食事内容は、一人一食に細い芋が三本程度、汁は海水から作った。アクだらけの塩で芋の葉をゆでたものだ。兵隊たちは罌わなを仕掛けてネズミを捕獲した。トカゲも捕まえた。そのうちにこれらの生き物もほとんど食べつくした。目を開けているが、目にハエが止まっても瞬まばたきする力もなくなる。兵隊の大半は栄養失調にかかっている。カイセンと呼ばれる皮膚病にかかっている。体力が徐々に弱り、そのうち体がむくみ、起こしても起きない。死んでいるのである。この当時は気力だけ。まもなく戦争は終わった。18歳の時だった。復員して14～5年、戦闘の夢を見てうなされたり、跳ね起きたり、異常な行動が度々あった。戦争中のトラウマによる悪夢の結果だったのであろう。終戦少し前、司令長官が、「死ぬなよ、これからの日本はお前たちの若い力が必要だ、死ぬなよ」あの時の言葉は今も耳の底にこびりついている。戦争を体験し、「平和な豊かな国を作りたい」との思いが戦後の貧しい生活を暮らせた原動力だと思う。

〔練習兵〕高杉信美著より抜粋

なお、高杉信美さんは、令和元年にお亡くなりになっており、ご本人の著書より抜粋し掲載しています。



## 聞き取り

小林 昌仁さん  
西落合一丁目在住  
終戦時：11歳

## 爺の戦争体験と平和への願い

終戦の年は千葉の茂原に住んでいた。3月の東京大空襲に続き6月には千葉市も空襲を受け、海軍航空基地のあった茂原でも艦載機の機銃掃射を経験した。庭の防空壕に逃げた。10km先の九十九里浜に米軍上陸の噂もあったとかで、6月に弟と二人、福島<sup>あいづ</sup>の会津<sup>えんこ</sup>に縁故疎開した。国民小学校4年生だったが教室で勉強した様子が浮かばない。外で田植えや畑の手伝いや秋には蝗取りをし、茹でて校庭で干した。匂いが強く今でも食べられない。蝗は仙台<sup>いぬま</sup>の陸軍幼年学校に送られた。

おやつは冷たい湧き水にトマト、きゅうりがあり空腹はなかった。遊びは田圃の間を流れる狭い溝を堰き止め、急いで水を掻き出し小魚や泥鰌を捕まえた。夕方近所の川に長いタコ糸に釣り針を沢山つけて仕掛けを置き、翌朝引き揚げ釣った魚が喜ばれた。

8月15日正午皆ラジオの前に集まり、天皇陛下の「終戦の詔書」を聞いた。ラジオの音が悪く、負けたらしいとの大人たちの話に緊張感を感じた。

翌年の春約1年の疎開生活に別れ、戻る。

両親と妹やワンくん、ニャンコの生活に戻り

ホッとしたのは忘れられない。中学校は残っていた海軍航空隊の宿舎で約1時間の通学だった。中学校も勉強時間が鮮明でない。広い校庭にさつま芋の畑を作り水遣り、人糞撒きで育てた。米軍が駐留しジープで走り回り、子どもたちを見るとキャンディーを撒いた。覚えた英語は、「プリーズギブミーチョコレート」だった。

NHKの朝ドラ「あんぱん」は陸軍初年兵の日常生活をリアルに放映している。非人間性の集団生活、予科練崩れと後ろ指さされた青年たちを思い出す。新聞、テレビは連日のようにロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザとイラン攻撃、トランプ大統領の武力だけが物を言う発言を報じている。こう書いている時間にも当事国の若者たちは戦場に駆り出され戦火にさらされている。戦争は駄目だ。

今、テレビはベ이스ターズとロッテ戦で猛暑の中横浜スタジアムはファンの若者で満員。明日は都議選。若者の皆さん、君たちの未来がかかっています。棄権はしないでほしい。

この平和が長く続きますように。



## がくどう そかい 学童疎開の日々

### 聞き取り

やまぐち みつこ  
山口光子さん  
大久保二丁目在住  
終戦時：11歳



尋常小學唱歌

### 疎開～終戦、子どもたちへの思い

昭和19年～20年の間、世田谷区の祖師谷国民学校の5～6年生の時、長野県西筑摩郡山口村（のちに長野県木曾郡山口村）というところに、妹と一緒に疎開していました。疎開先での生活は苦しく、早く帰りたいという一心でした。村では食べるものがなく、子どもたちはみんな、山にゼンマイやフキを拾いに行きました。「何か仕事します」と子ども心に、農家を一軒ずつ回り、草むしりなどを手伝って、そのお返しにお芋やさつまいもをもらいました。それが嬉しくて、みんなお手伝いをする日々でした。

お風呂は近所の農家の方に借りて入り、顔を洗うのは氷の張った水でした。ノミがいっぱい出るので、毎日夜中に必ず一度起こされて、爪でノミを潰していました。女の子はシラミを防ぐ白い粉のようなものを頭からかけて粉だらけになりました。

どんなに寒くても雪が降る日でも毎日、近くの神社に体操に行き、東京の方に向かって、お父さんお母さんに「元気ですから」と歌を歌いました。

父が面会に来た時の記憶ですが、「お菓子は先生に見つかる」と取り上げられてしまうから持ってこれないけど…」と

言っていて、薬の瓶の中に入れて角砂糖をくれたんです。それを私と妹で隠れながら食べていました。

そんな生活の中で、一番辛かったのは、ある日面会に来た父が、ひどく痩せ細った妹を見て「こんなに痩せて、ここにいたんじゃ殺されてしまう」と妹だけを連れて帰った時のことです。東京に帰ろうと歩く二人の背中を泣きながら追いかけた記憶があります。

終戦は山口小学校の校庭でみんな並んで聞きました。みんな跪いて泣いていました。



疎開先の記録集



### 近所の中学生との交流

近くに住んでいる中学生の子が、学校の学習の一環で、戦時中のお話を取材しに来てくれたんです。とても上手にまとめてくれました。



家族写真

東京に戻ってからは、長女として弟たちの子育をしながら、実家のケーキ屋を朝から晩まで手伝っていました。その後お嫁に行き、縁あってこの町に住んでいます。

自分の経験をお話して、子どもたちが少しでも当時のことをわかってくれればいいなと思いますね。もう二度と戦争はしたくないです。



#### 不思議なご縁

驚くべきことに、娘の嫁ぎ先が偶然、疎開した山口村でした。当時終戦の放送を聞いた山口小学校は娘の夫が卒業した小学校で、孫も同じ小学校に通いました。本当にびっくりなご縁です。娘の姑が山口小学校の教師をしていたため、当時の資料を色々集めて送っていただきました。

疎開

## 泣きながら別れを惜しんだ学童疎開

寄稿

山崎 金也さん  
北新宿一丁目在住  
終戦時：11歳

昭和の時代に活躍した各界の著名人が、相次いで黄泉の世界へと旅立ち、同世代の私には昭和という時代が遠くにかすんだような寂寥たる想いです。

戦中で忘れられないのは、何と言っても学童疎開です。当時10歳前後の子どもたちが初めて親と離れて生活するのは、疎開先に出発する我が子を見送るべく新宿駅に集まり、各所で手を取り合っ泣きながら別れを惜しんで居りました。親としてもこれが今生の別れかと辛かったと思います。

疎開先の草津について、大広間に20人程ずつ寝るのですが、中には声を出して泣く子も居り、2～3日は熟睡できませんでした。広間では、午

前中に勉強し、午後には勤労奉仕をさせられました。駅から3km程離れた療養所に大根を荒縄で5、6本背負わされ運ぶのですが、何せ空腹で途中座り込んで1本また1本と抜いては食べ、着いた時には半分も無く、よく先生に叱られたものです。何せ10歳の食べ盛り、いつも空腹で、売っているものといえば粉のわさびで、よく水でといて辛いのを我慢して食べたものです。

今の飽食時代には到底想像もできませんが、あの時代は何事も我慢我慢で、今でもその癖が抜けず、充分粗食に耐えられるので、家族には美味しいものを知らないんだから、と馬鹿にされている日々です（笑）。



## あさま ふもと そかい 風香る浅間の麓へ疎開

### 寄稿

かなざわ まこと  
金澤 誠さん  
高田馬場一丁目に住  
終戦時：10歳

1945（昭和20）年8月15日、近隣の人たちが家に集っていた。天皇陛下の玉音放送（ぎょくおんほうそう）を聞きに。TV等無い時代である。ラジオも家にしか無かった。

ここは浅間山（あさまやま）の麓（ふもと）、夏は25℃を超えることが無く涼しい高原地帯である。1944（昭和19）年4月から、母と姉、私、弟と4人で疎開（そかい）していた。私は小学校4年生である。小学校は町にしか無かったが、ちょうど4月から近くに分校ができたのでそこに通った。校長先生が逸見（いみ）先生、担任が栗本（くりもと）先生（女性高等女学校在学）だった。ここは戦前、ピアノ教室、絵画教室（えい）が開かれて居て、姉が通って居た。一度テストで96点をとった。69点は何回もあったが、96点は初めて。母に答案を見せて「良い点とったから、遊んでくるね」と言ったら、母から「今度は100点ね、さあ、お勉強」と言われ、え〜っと思ったことがあった。学校では勉強、家に帰れば遊び優先なのに。落葉松（いま）は未だ低木、ハダカで木にしがみつき上り、上から数メートルは緑色、今年成長した部分、そこからは上れない。木から下り胸と腹はカスリ傷だらけ。母にしかられながら赤チン（あかちん）を塗って貰（もら）った。

清水で岩魚（いわいそ）を追いかけ、桑（くわ）の木に上り唇（くちびる）をムラサキ色に染める程（ほど）実（み）を食べ、アケビを食べた時、これはアイスクリーム（アイスクリーム）より美味（おい）いと思った。甘い物等無かった。何を食べて居たのかって！そう、農園のおじさんが手入れしてくれた、かぼちゃ、トウモロコシ、米（こめ）はあまり食べられなかった。

家でラジオを聞いて居た人たちが帰っていった。うつむき涙ぐんで居る人も居た。終戦から1週間後（あと）私たちは上野（うえの）行き（の）汽車（くるま）の中（なか）だった。農園のおじさんの植（う）えてくれたソバ（そば）の花（はな）が真っ白（しろ）だ！私の小さなリュックには庭（にわ）で採（と）れた大きなかぼちゃ、重（おも）かった。汽車（くるま）は動（う）いたり止（と）まったり、ようやく上野（うえの）駅（えき）にそこ（こ）から省（しや）線（せん）で神田（かんだ）駅（えき）へ、ホーム（ホーム）から見た東京（とうきやう）は一面（いちめん）の焼（や）け野原（の）原（はら）、父（ちち）の事務所（じむしょ）と家（い）のある日本橋堀留町（にほんばしほりどめちやう）、小伝馬町（こでんまちやう）の一部（い）だけ家（い）が残（のこ）って居た。公園（こうえん）には大勢（おほしやう）の人（ひと）を一緒（いっしょ）に葬（くわ）った大きな塚（つか）が。ビックリ（びっくり）する光景（こうけい）。疎開（そかい）先（さき）の同級生（どうきゅうせい）、相馬（さくま）さん、中村（なかむら）さん、葛原（くわはら）くん、山口（やまぐち）ジロちゃんにはもう会（あ）えない。東京（とうきやう）では嘉手納君（かてなくん）他（ほか）2〜3人（にん）が居（い）なかった。私の疎開（そかい）生活（せいかつ）は楽し（たの）しかったが母（はは）の苦勞（くらう）は大変（たいへん）だったと思う。戦争（せんそう）は二度（にど）と起（お）こしてはならない！



## 私の少年時代

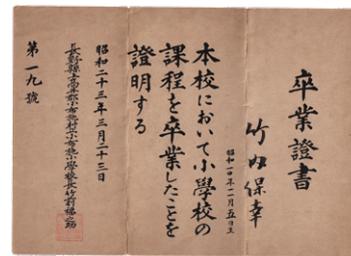
### 寄稿

たけうち やすゆき  
竹内 保幸さん  
高田馬場三丁目在住  
終戦時：9歳

私は今秋に90歳を迎えます。記憶によると、私の少年時代の日本は大変な時期にありました。第二次世界大戦中でした。同盟国のドイツとイタリアはすでに降伏し、日本だけが戦争を続けていました。戦況はだんだん悪化して、いよいよ日本本土が空爆される事態となっていました。そこで、今後の日本を担う大切な児童たちを守るための方策がとられました。いわゆる「疎開」です。学校単位で安全な場所に移動する「集団疎開」は先生も一緒でした。お寺の本堂などが使用されました。この生活になじめず、母恋しさに脱走する児童も出たそうで、悲しい事例でした。もう一つは、知人、縁者を頼る「縁故疎開」です。こちらは問題はなかったようです。

3年生の一学期末のことでした。母親から「お前を私の知人宅に預ける。さびしいだろうが我慢しなさい。」と告げられ驚きました。初めての転校です。その地は、北信濃ののどかな山村でした。お寺の一部を借りての家庭でした。季節は夏で昼間はセミの大合唱でした。私は夢中になって、トンボやセミを追いかけました。親のことなど忘れていました。「そんなにセミを採って、つくだ煮にして食べるのか？」とまで言われました。私はこの地の夏を満喫していました。しかし、ここは

他人の家です。「遠慮する、我慢する心」が自然と育ったと思います。



疎開先の学校での卒業證書

楽しかったこの地での夏も終了し、再び親子3人の生活が戻りました。父の実家の村へ移りました。転校も2回となりました。この地はリンゴの栽培と養蚕が盛んです。都会育ちの母も手伝っていました。ある日、編隊を組んだ飛行群を見ました。米軍のB29だそうです。日本軍も高射砲で応戦するのですが届きません。打ち上げ花火のようでした。息を呑んで眺めていました。この後の私たちは厳重な注意を受けました。夏でしたから全員が白シャツ姿でした。危険でしたが強烈な思い出になりました。

しばらくして終戦の日を迎えます。この地で6年間も平和に過ごせましたが東京の家は空爆で全焼したそうです。現在も戦争は絶えません。戦争は残酷です。地球上の全世界が平和であることを願ってペンを置きます。



## すわ 諏訪(長野県)からも見えた 東京空襲の赤く染まった空

### 聞き取り

おおにし よしこ  
大西 好子さん  
百人町三丁目在住  
終戦時：9歳

昭和19年6月頃だったと思います。小学校3年生の私は、小学校6年生の兄と一緒に長野県岡谷の諏訪湖近くにある千鳥園という旅館に集団疎開をしました。旅館の1階は男子、2階は女子のスペースでした。お風呂は諏訪の良い温泉で、お寺になった子もいましたが、旅館で良かったと思いました。諏訪湖ではタニシを採って味噌汁に入れたり、イナゴを捕ったりしました。山に入ると松茸がたくさん採れたり、楽しい経験もたくさんできました。学校へ行く途中、空襲警報が鳴ると慌てて戻ります。怖い思いはそれほどなかったのですが、いつも落ち着かない気持ちでいました。諏訪からも東京が空襲を受けて、空が赤く染まっているのが見えました。

諏訪湖の上の方に兵隊さんがいて、時々子どもたちと遊んでくれました。その時に歌を作って歌ってくれました。「昭和19の夏半ば、戦いいよいよたてきころ、ここに学べる子どもらは、御国

の末を背負う人」という歌詞でした。

夫は、深川で生まれ育った人で、兵隊には行っていませんが、東京空襲の時には、たくさんの方が木場の水の中に飛び込み、そのまま亡くなっているのを見たそうです。防空壕でもたくさんの方が亡くなっていて、あの光景は目に焼き付いて離れないと言っていました。

終戦となって、暮れに東京に戻ってきた時、小学校は焼けてしまい、コンクリートでできた朝礼台だけが残っていました。当時は、食べ物と着るものが一番大事でした。子どもの私もリュックを背負って、川越の方まで芋を買いに行くのですが、着物がほしいと言われて、持って行って交換したりしていました。

戦争中は、ほとんど勉強はできませんでした。今も世界では戦争が起きていますが、あのようなことは、二度とやらないでほしいと思います。

## 聞き取り

にしかわ かずこ  
西川 和子さん  
新宿四丁目在住  
終戦時：9歳

## そ かい 疎開先での思い出

私は昭和19年の小学校2年の時に、千葉県市川市から、父母と弟の一家4人で、山形県の母の実家に疎開しました。

戦時中で一番印象に残っているのは、戦車の通る音です。道路をガーっと、もの凄い音で走っていました。その大きな音が今でも耳に残っています。東京が大空襲の時は山形にいたので、そこまで怖い経験はありませんが、山形でも空襲警報が鳴った時は、銃弾が飛んでくるよと言われ、自宅の庭に作った防空壕の中に逃げていました。大事な物や食料品なども普段から防空壕に入れていました。

食べる物はまだあったほうだと思います。それでも白いご飯が少なく、野菜を入れて炊いていました。母の実家は農家ではないので、食べる物が無くなると、父や母の着物を食料に替えていました。配給の時は行列ができますが、配給の物だけでは全然足りなかったです。配給の中で覚えているのが、鮭の缶詰とトウモロコシの粉です。トウモロコシの粉で作ったお団子は美味しかったです。

親元から離れて集団疎開で来ていた同級生の中には、朝ごはんを食べてこない子がいたので、お昼に家に連れていき、母に頼んで食べさせていました。

疎開当初は東京言葉を使っていると言われて、

学校でいじめられて辛かったです。受け入れてもらうまで時間がかかりましたが、そのうちに馴染んできてお友達ができました。

終戦の時は、天皇陛下のお話があると聞いて、みんなでラジオの前に集まりました。お話の内容は良くわかりませんでしたが、大人が明日から飛行機が飛んでなくなるよと言っていたので、戦争は終わったのだと感じました。防空壕に入らないでよくなったので、子ども心にも気持ちが楽になりました。

終戦後は、仕事のために父だけが上京していました。私たちは10年ほど山形に残り、上京した時にはもう大人でしたが、家族と一緒に住むことができ嬉しく思いました。東京での生活は楽しかったです。

戦争は人の命も、素晴らしい建物も一瞬のうちに破壊してしまいます。人の命を何だと思っているのでしょうか。建物を元に戻すのに、どれだけのお金と労力が必要だと思っているのでしょうか。しっかりと教育を受けている人たちなのに、無駄なことをしているというのがわからないことが理解できません。

今は自由で物も豊富です。平穏で暮らしていることが本当に有難いです。若い方たちもこの状況が当たり前だとは思わず、自由を履き違えずに、感謝の気持ちを忘れずにいて欲しいです。

## がくどう そかい 学童疎開を語る

寄稿

芳川 雅信さん  
喜久井町在住  
終戦時：8歳

昭和20年3月10日の東京大空襲（下谷、本所、向島、深川等今の台東区、墨田区、江東区等）を近衛公爵邸の防空壕で震えながら遠目に見た直後、淀橋区下落合1丁目421番地（現在は新宿区下落合2丁目16番付近）（注 中村彝アトリエ記念館の展示地図に残っている）から椿山荘（大叔母の邸）に引っ越した。僅か数日後の3月22日に学童疎開のため、学習院初等科3年生になる直前に日光に向かった。

満8歳で学童疎開に親が了解し送り出したのは長男で跡取りの立場にある者との思いが強かったと考えられる。今の椿山荘冠木門（昔は裏門）を勇ましく出発、市電で上野駅に行き未だ幼い小学生の集団が目的地の金谷ホテルに向かう。今ではあり得ない風景。

集団生活は受持ち教諭二人（主管）と若い寮母の方々の温かい指導お世話により総体的に恵まれ後年大人になった後はクラス会にお呼びして旧交を温めることになる。

一学年上に常陸宮殿下（当時は義宮）が居られた。昭和から平成に代替わりした際、読売新聞に当時の食堂での風景（アルマイトの食器で大勢の朝食風景）が掲載されている。

学習院だから恵まれていたでしょうと言われる

が、食糧事情は頗る悪くヤブカンゾウを食したりという部分も見られた。東京から生徒の親が来て菓子等を持参すればそれこそ鷓鴣の目鷹の目で羨ましがった場面が多々あった。それでも周辺部（日光東照宮・日光二荒山神社・大谷川・神橋）は多く歩いたので十分見た。今の現地の繁栄を見ると隔世の感である。

戦況悪化して7月26日父が迎えにきて長時間満員の汽車に揺られて今の箱根小涌園（大叔母の別荘）にたどり着き3週間後に終戦。

ちなみに椿山荘は5月25日山の手大空襲の飛火で全焼、両親、妹、弟は無事で箱根に越した。

戦後特に三年間は（華族制度廃止で）苦しい生活であった。初等科は戦後11月には再開し学業は問題なかった。個人疎開者も戻り楽しい日々が送れた。住まいは親戚に頼ったり、椿山荘内の焼け残った守衛宅に住んだり波乱万丈の日々、両親の苦労は大変なものがあった。配給だよりのホットケ（今は高級魚）、ラジオの尋ね人など記憶に残る。25年に今の新宿区喜久井町に落ち着き爾来75年本当に良く生きた。「子どもの単身赴任」を経験し我慢を強いられたからこそここまで長寿が全うできた。有難いことでもあります。



## 私の戦争体験記

### 寄稿

碓井 達彌さん  
北新宿一丁目在住  
終戦時：6歳

昭和19年、私は5歳でしたが、東京本郷区、今の文京区に住んでおりました。近々東京は空襲になるという情報が入ったので、疎開命令が出ました。私の家族は父の故郷、山梨県日野春村に疎開することにしました。母は3歳の弟を背負い、父は私を背負い、小学3年・4年の姉たちはランドセルを背負い、4人とも両手に風呂敷包みを持って列車に乗り、当時、5時間かけて日野春駅に着きました。1日目は親類宅に泊まり、2日目からは埃だらけの家で生活が始まりました。翌年、私は日野春国民学校1年生になりました。片道一里、約4キロメートルの道を、雨・雪が降ればドロコだらけの道を通いました。

時々、B29という飛行機が低空を飛んでくることがありました。米兵の顔が見えるくらいでした。学校では勉強もそこそこに、森の中で竹槍を持たされ、エイエイヤーと米兵をやっつける訓練をしました。毎日、空腹をかかえて通学しました。こんな状態で日本が勝つ筈がありませんよね。

ある夜、空襲警報が鳴り、外へ出てみると甲府の空が真っ赤に燃えていました。20年6月頃だったようです。

そして2か月後、8月15日がやって来ました。お昼にラジオを聴くようにという知らせがあったようです。昭和天皇のかん高い声が具合の悪いラジオから聴こえてきました。小学1年生の私には何が何だかわかりませんが、戦争が終わった、戦争に負けたということだと知らされました。

東京は焼け野原で、すぐに戻ることはできませんでした。小学5年生まで日野春で暮らし、6年生の時、再び文京区に戻りました。小学校・中学校・高校までは貧しい生活が続きました。

私が今思うことは、戦争は、絶対にすべきではないということです。人々を貧しさと絶望の中に落としめるだけです。

世界から戦争が無くなってほしいと切に願っております。



## 戦時・戦後を生きて

### 寄稿

羽原 清雅さん  
馬場下町在住  
終戦時：6歳

終戦間際の昭和20（1945）年4月、新宿区しんじゅくが生まれる前の牛込愛日小学校に入学、一日も登校することなく栃木県栃木市えんつうじの圓通寺に学校ぐるみの「学童疎開」の一員になりました。その前の1年ほどは、戦争を避けるために神奈川県にのみやまち二宮町の知り合いの家に「縁故疎開」をしていました。どちらも両親と離れ離れとなり寂しさばかり、7、8歳の子どもにはつらいものでした。

お寺には、1～6年生が4、50人いました。寝る前には毎晩、ふとんの縫い目に入り込むノミ、シラミ取りを全員でします。クレゾール（薬品）の入った小瓶につまんでは入れていきます。食事はご飯少しとおかずも少し、いつも空腹です。小学校に行くと、軍隊が駐留しており、大きな釜でご飯を炊き、みそ汁やおかずのいい匂いが校内に漂います。おなかが鳴りました。でも、子どもたちに給食などはありません。

お寺では毎朝、お弁当を作ってくれます。コメが密集したおこげが大人気で、1年生のおこげの順番だった僕の弁当がある日、上級生に取られて、泣いたことがあります。また、威張った6年生が、4年生の男の子にどんぶり一杯の水を無理やり飲ませるといった「いじめ」もありました。誰も、止めませんでした。

いいこともあって、お寺の池には竹で編んだ筒状の魚を捕る籠が仕掛けられており、時折魚が入っていました。終戦を知らせる天皇の放送は、難しくわかりませんでした。先生が小さな声で「戦争が終わった！」というので、みんなで飛び上がって喜んでいたら、叱られました。

9月に入って、東京に戻りました。ところが家がないのです。戦争の空襲で火災が起こるので、防火帯として一帯の家屋を撤去したため、住む家なくなっていました。愛日小学校も火災で全焼、焼け野原になって、まもなく校庭だったところに被災者のためにバラック（小屋）が建てられました。

そのため、愛日小学校は一時廃校状態となり、僕は隣の市谷いちがや小学校に転校しました。結局、卒業も市谷いちがや小学校でした。小中学校時代は住む家がなく、間借り生活が続きました。子どもなのに、騒ぐと叱られ、勉強机もない狭い部屋での日々でした。勉強どころではなく、コメの代わりに腐ったようなイワシがバケツで配られ、焼け跡で育てた水っぼいかぼちゃを食べさせられました。とにかく食べ物がないのです！

母の弟は、学生時代に旧満州まんしゅうに兵隊として召集され、そこで死に、遺骨の代わりに小石一つが入っ

た箱が戻ってきました。「お国のため」として戦争に行き、悲しみだけを残しました。

その戦争から80年。日本には平和が続きました。でも、海外では大国の抗争、宗教や民族の戦乱、侵略のための戦争などが続いています。戦争は兵士だけではなく、街の人々を無差別に殺害します。見境なく命を奪うのです。

敵対する国と国、民族の違う人々同士、憎しみ合う近隣の一群、領土を広げたい強国の侵略など。平和のような日本でも、軍備が増強され、隣国などとのにらみ合いが続き、人々の交流が徐々に閉ざされ、次第に感情は不穏、憎悪、軽蔑、守りから攻撃気分へと次第に変化していきます。戦前の日本が中国や朝鮮半島、アジアの諸国に侵

出したという歴史が忘れられていくと、いつか日本も不安定な状況に変化しかねない懸念もあります。戦争は少しずつ段階的に積みあげられていくもので、いつか何かのきっかけができると、相手国への憎しみが高まり、愛国心という興奮が炎上して、戦闘に向かいかねません。昨今の政治を見てもわかるように、「軍事」が先行して、和平を求めて交流するための「外交」がとり残されていきます。

学童疎開<sup>がくどうそかい</sup>から戦後の日々を思いつつ、僕は戦争や沖縄の話を書いてきました（「沖縄『格差・差別』を追う—ある新聞記者がみた沖縄50年の現実」「日本の戦争を報道はどう伝えたか—戦争が仕組まれ惨劇を残すまで」とともに書肆侃侃房刊）。

その結論と言うなら「戦争は悪」ということです。





## あとほんの少し、戦争が早く終わっていたら

### 聞き取り

すだ さちこ  
須田 幸子さん  
百人町一丁目在住  
終戦時：6歳

私は6歳で終戦を迎えたので、戦争体験は幼いころの記憶になります。目黒に住んでいましたが、母の実家である千葉県船橋市に疎開しました。4月に小学校に入学、5月には戦火を避けるため、父の実家のある福島県に疎開し、終戦となりました。

千葉では、幼稚園の帰り道にいつも空襲警報が鳴り、友達と草むらの中にあるU字溝のようなところに隠れて、祖母が迎えに来てくれるのを待ちました。周辺には軍事施設がありましたが、爆撃を受けることはありませんでした。米軍は、この場所をキャンプとして使用するため、爆撃せず残っていたようです。爆撃されるという怖い体験は、千葉ではありませんでしたが、空襲警報はしょっちゅう聞いていました。警報が夜中に鳴ると、祖母が起こしに来ます。2月の寒い中、綿入れを着せられて敷地内の防空壕に入ります。防空壕の中には、ストーブや生活用品もあり、中に入れば暖かでした。あるとき、B29が飛んでいく先の東京の空、西の空が、夜中であるのに夕焼けのように真っ赤に染まっていたことがありました。この光景は今でもよく覚えています。

戦火が厳しくなったのを避けるため、父の実家である福島県の三春に疎開しました。汽車で向かう途中、機銃掃射の攻撃を受けました。汽車は攻撃

を避けるため、トンネルの中で停止しましたが、しばらくして三春の駅に着くと、再度機銃掃射で攻撃され、山の中に散り散りに避難しました。そのとき、耳の遠いおじいさんがいて、「逃げろ」という言葉が聞こえずウロウロとしていました。そのおじいさんを機銃掃射が狙うのですが、自分たちも四方八方に逃げているところでしたので、余裕はありません。幸い全員無事でした。福島の家は、山の中腹にある大きな家でした。田んぼと桑畑、柿の木しかないのですが、夜は蛍がびっくりするほどたくさん飛んでいて、菜種油を搾ったがらを束ねて振り回すだけで蛍が取れました。そのまま家に持ち帰り、部屋の中に放すと蛍が光ってとてもきれいでした。福島では、珍しい光景も見ました。赤や青、黄色の光の玉が見えて、時々上にシューッと上がって消えるのです。地元の方は、「狐の嫁入りだよ」と教えてくれました。学校には、いともいて、畑のキュウリをもいで食べたり、戦争中であつたのに、子どもとしては楽しい思い出です。

終戦日の少し前、8月6日に父は戦死しました。弟たちはまだ幼く、父の顔も覚えていないと思います。あとほんの少し、戦争が早く終わっていたら、父は死なずに済んだのにと、今でも思います。



## 罪のない子どもたちの ためにも、戦争は二度と してはいけない

### 聞き取り

ふじむら  
藤村さん  
上落合三丁目在住  
終戦時：5歳

実家は元々日本橋で呉服屋を営んでいました。私が生まれてすぐに父が出征し、母と二人残されました。母の実家は本郷にありましたが、祖父母と障害のある母の妹が住んでいました。戦火が厳しくなったころ私と母は、面影橋近くにあったオリジン電気という会社に勤めていた伯母の紹介で、その会社のある栃木県の真岡町（現在の真岡市）に5歳で疎開しました。終戦後も小学校を卒業するまでは、真岡町で過ごしました。母方の祖父母は疎開せずに東京に残りました。家は焼けてしまいましたが、幸いみな無事でした。真岡町に行くには、上野から電車に乗るのですが、駅の近くには浮浪児が大勢いて、持ち物を狙われないよう気を付けて歩かなければなりません。電車も人が乗る車両ではなく、貨車でした。床に座った状態での道のりは、簡単なものではありませんでした。私も母と一緒に、食べ物確保のために買い出しに行きました。呉服屋でしたから、当時貴重だった着物を食べ物と交換しました。どこにいても、食べるものには苦労した時代でした。当時で思い出すのは、集団疎開をしている女学生が、町中で列をつくって歩いていたときのことです。両親と離れて過ごす淋しさなのか、お寺に身を寄せていたと思うのですが、食事が満足にできな

かったり、本来であれば勉強にいそみみたいところ、畑仕事などに駆り出されていた口惜しさなのか、東京の戦況を案じてなのか真意はわかりませんが、涙を流しながら歩いていたことが子どもながら印象に残っています。空襲の怖さはあまり体験しないで済みましたが、一度だけ高台にある赤十字の病院が狙われて、爆撃を受けました。その時は川の近くにある防空壕へ逃げました。離れていたのが被害もありませんでしたし、空襲の記憶はそのくらいです。それでも、父の仕事の関係で時々上京した折に焼け跡を見ており、本当に何もなく、遠くまで見通せる状態で、空襲の恐ろしさを感じました。

父は私が生まれてすぐ戦争に行ってしまったので、帰ってくる父を迎えにいったとき、私は顔もわかりませんでした。父は軍で食糧管理をする仕事についていたため、私たちよりも良いものを食べていたようです。帰ってきたときに甘いものも持ってきてくれました。

小学校生活は、イナゴを取って校庭に干したり、山に枯れ枝を取りに行ったり、おおよそ今からは考えられない環境でしたが、今でもイナゴの佃煮を売っているのを見つけると、子どもたちは食べないのですが、つい買ってしまいます。その疎開

先から中学1年生で東京に戻りました。

私が戦時中、直接空襲を受けることもなく過ごせたのは、伯母の「縁」があったからだと思います。私は教師になりましたが、戦中・戦後と様々な子どもたちを見てきた経験から、改めて資格を取り、障害児の教育に携わることを選びました。

そして退職後も地域の中で、こうした子どもたちの支援に取り組んできました。今も戦争によって罪のない子どもたちが、けがをして障害を負ったり命を落としています。戦争は二度と、絶対にしてはいけないと強く思っています。

疎開



## 体験を人生に生かす

寄稿

かみやま きよひで  
神山 清英さん  
中町在住  
終戦時：5歳

戦局が傾くと空襲を避け東京の豊島<sup>としま</sup>から、伊豆東海岸<sup>いとう</sup>の伊東<sup>そかい</sup>に疎開しました。両親にとっては、義理の父母相当の親戚の家への間借りで、肩身が狭くなるような苦労は少なかったようです。とは言え、食料や衣料<sup>ひっぽく</sup>は逼迫し、どこの家族も生きていくのに必死だったようです。

疎開先<sup>そかい</sup>ではすぐに受け入れてもらえず

疎開先<sup>そかい</sup>の土地の方たちとの考え方の相違があり、難儀<sup>ざら</sup>だったようです。どぶ浚い、お祭りへの寄付、

物資の配給時の連絡や受取など、苦労の種は尽きないようで、土地の方たちから受け入れてもらうには、時間が必要でした。

いつ生命が絶たれるかわからない

幼年学校の親戚のお兄さんと大人の会話を、脇で聞きました。物事を中途半端<sup>ちゆうとはんぱん</sup>にしておかないようにする、生命が突然絶たれた時に身ざれいな死に際とならないという主旨です。私は小学校就学前ですが、生死を感じる日常でしたので、年齢に

は不釣り合いなこの会話ですが、鮮明に覚えています。

### 夜は寝間着に着替えて寝られる

疎開先でのこと、夜中に突然起こされて、両親が東京から逃げてきたと告げられました。米軍投下のビラに、大規模空襲予告があったそうです。爆撃機B29による空襲で、夥しい焼死者が出たので、恐怖に駆られて逃げてきたのです。東京は毎夜の空襲で、寝間着に着替えることができず、逃げて来た晩は寝間着に着替えることができ嬉しかったそうです。

### 焼け跡にあったガラスの塊

東京の豊島の住居一帯は焦土となり、後始末をお願いした方が、ひしゃげたガラスの塊一つだけ証拠に持参し、両親に見せていました。なにもかも灰燼に帰っていたそうです。

### 再疎開が不要になる

米軍の日本本土上陸進攻は相模湾からとのことで、米軍の艦載機が伊東の上空にも飛来するようになりました。庭先に防空壕を掘り、敵機来襲となると、中に退避しました。

こんな逼迫した状況ですので、再度の疎開先が必要となり、候補地が富士の須走でした。その準備をしたのは、終戦日8月15日の直前でした。

## 8月15日の玉音放送

昼頃、座敷に疎開していた家族や親戚などが集まり、NHKの放送を聞きました。ラジオは唯一のリアルタイムの情報源でした。皆揃ってがっかり、その様子を覚えています。

### 飛行機が怖い

上空の飛行機を見ると、小学校高学年頃まで恐怖を感じました。就学前の経験から来る、空腹に勝る空襲の恐怖でした。

どれにもこれにも、思い出したくない影が伴っています。非日常の体験でも、人生前向きに役立てようと常に思っています。終戦から80年、元気に過ごしていただける日本の安寧に感謝しています。でも、戦争は嫌だ！

## 寄稿

くりはら やすみち  
栗原 靖道さん  
若葉一丁目在住  
終戦時：4歳

## 戦時中の記憶から

私は、太平洋戦争が始まった昭和16年、千代田区<sup>ちよだ</sup>隼町<sup>すま</sup>の生まれ。この辺りが空襲を受けたのは昭和20年5月25日。各地で空襲が激しくなり始めた頃、新潟<sup>そかい</sup>に疎開し、小学校に入る前に千代田区<sup>ちよだ</sup>平河町<sup>ひらかわちよう</sup>へ戻ってきた。

私には4人の姉がいた。母は仕事をしていた父の手助けで忙しく、一番上の姉が3人の妹と私の面倒を見てくれた。三番目の姉が河口湖畔<sup>かわぐちこはん</sup>に学童疎開<sup>がくどうそかい</sup>をした時の話を聞いたことがある。姉は当時永田町<sup>ながたちよう</sup>小学校の3年生。

学童疎開<sup>がくどうそかい</sup>に出発したのは昭和19年8月27日。早朝、午前6時半に校庭に集合して7時20分出発。四ツ谷<sup>よつや</sup>駅まで行進した。姉は泣きながら歩き始めた。出発を見送りに行った二番目の姉は、行進する児童たちの中から泣き声<sup>なみこゑ</sup>がいつまでも聞こえていたと父母に報告した。

富士吉田<sup>ふじよしだ</sup>駅（現在の富士山<sup>ふじさん</sup>駅）から河口湖畔<sup>かわぐちこはん</sup>の船津村<sup>ふなつむら</sup>（現在の富士河口湖<sup>ふじかわぐちこまち</sup>町）へ約4キロの道を歩いた。河口湖畔<sup>かわぐちこはん</sup>は今でこそ賑やかなリゾート地であるが、学童疎開<sup>がくどうそかい</sup>の小学生がやっと到着した河口湖畔<sup>かわぐちこはん</sup>は人影のほとんどないところだった。疲れ切って疎開先<sup>そかい</sup>の河口湖ホテル<sup>かわぐちこ</sup>についた姉は、「あー、ここから1人で父母のところには帰れない」と諦めの気持ちになったそうだ。

学童疎開<sup>がくどうそかい</sup>では家族と疎開児童<sup>そかい</sup>の面会は自由では

なかった。面会人は1人、毎学期に1回、保護者宿泊の場合は1日3合の米持参など決められていた。児童の中には家族に会いたさから疎開先<sup>そかい</sup>から脱走する者もいたらしい。母が姉の面会に行ったときのことだ。母は駅から夜道を河口湖<sup>かわぐちこ</sup>へ向かって歩いていく途中、真っ暗闇の中で崖から落ちてしまい必死に這いずり登ってやっと疎開先<sup>そかい</sup>にたどりついた。

生活はひもじかった。食事は次第に代用食になり豆や芋の中にやっと米粒を見つけることもあった。村の人が時にはふかし芋や正月の餅をくれることもあった。また、児童たちは虱<sup>しらみ</sup>の大群にとても悩まされたらしい。朝晩、手や足が冷たいので手袋を編んで送ってほしいと一番上の姉に出した「はがき」が残っている。茶色になった「はがき」には乃木大将の肖像の3銭切手が貼ってある。

私が疎開先<sup>そかい</sup>の新潟から千代田区<sup>ちよだ</sup>へもどってきたのは昭和21年。平河町<sup>ひらかわちよう</sup>のあたりも空襲による瓦礫<sup>れき</sup>の焼け野原だった。焼け野原の先に国会議事堂が見えたのを覚えている。焼け残ったトタンや木材で組み立てた粗末な家、バラックの小屋があちこちに建っていた。

父母は逝き、4人の姉たちは三番目の姉だけになってしまった。



昭和17年頃の写真

## 自由をあきらめざるを得なかった

### 聞き取り

しみず  
清水さん  
終戦時：19歳

戦争のあった当時、私の家は牛込北町で電気工  
事を行う電気店を営んでいました。中通りは大き  
な家ばかりで、裕福なお得意さまに囲まれ比較的  
恵まれた生活を送っていました。

しかし、女学校4年生の時に戦争が始まり、戦  
争が激化するなか、間もなく授業は行われなくな  
り、代わりに赤羽にあった兵士詰所（旧東京第一  
陸軍造兵廠）の勤勞奉仕に動員され、兵器の詰め  
物をする作業に明け暮れました。

その当時は、「お国のため」という名目で、深  
刻な労働力不足を解消するために学生でも、子ど  
もでも、日本中の全ての世代が戦争に巻き込まれ、  
やむを得ず、いや、考えることもできず働いてい  
ました。

女学校卒業後は、新宿鉄道局に入局し、代々木  
の鉄道員の健康管理をする部署に配属になりました。  
ここは3年近く勤務しましたが、その間に、  
自分の家を含む愛日小学校の周りの家が、空襲に  
よる延焼をあらかじめ防ぐための「建物疎開」で  
強制的に取り壊されたため、中野にある家に転居  
しました。

でも、その中野もB29の焼夷弾の投下で焼け野  
原になってしまい（父と中野駅方面に逃げて、家

に戻ったら自分が住んでいた家を除いて一面、焼  
け野原になったのを見て茫然自失になりました）、  
結局、父の実家のあった山梨県竜王町に疎開し終  
戦を迎えることになりました。

私は幸い縁故疎開ができ、食料はさほど不自由  
はしませんでした。行く先々で良い人たちに会  
うこともできました。当時多くの人たちが食べる  
ものに困り、集団疎開した子どもたちが親元から  
離れ不安な気持ちで過ごしていたり、また従兄が  
学徒出陣で海軍に入り1か月も満たないうちに結  
核で亡くなりました。戦争中という状況であった  
にせよ、私は恵まれた生活を送ることができて  
いたのだと思います（もしかすると、いつも人に思  
いやりのあった父のおかげかもしれません。他人  
によいことをすれば、必ずよいことが返って来る  
といつも言っていましたから）。

ただ、自分がやりたいことをやる自由をあきら  
めざるを得なかったこと、そのような発想すら奪  
われてしまった、精神的に殺されてしまったに等  
しい多くの若者や戦争の犠牲になった人たちのこ  
とを考えると、戦争はすごく残酷なものだと思  
いますし、絶対に繰り返してはならないことだと思  
います。



## 私の戦争体験記

### 聞き取り

塩野 時枝さん  
百人町四丁目在住  
終戦時：15歳

私は疎開はせず、戦時中は生家のある土浦で過ごしました。茨城県には、予科練の土浦海軍航空隊と徴用で入隊した20歳以上の人が配属される霞ヶ浦海軍航空隊がありました。学校にバスが迎えに来て、土浦の予科練勤労奉仕で行きました。大きな紙から飛行機の教科書を作る仕事でした。予科練では、大きなお釜でご飯を炊いていて、それを珍しいと眺めていたことを覚えています。女学校は4クラスありましたが、勤労奉仕や竹槍の訓練など、勉強はあまりできません。そういう時代でした。農村に住んでいたのでも、空襲はなく、防空壕も掘ったのですが、水が出てしまいあまり入りませんでした。東京の空襲は土浦からも見えました。夜、東京の方の空が真っ赤になって、燃えカスのようなものも飛んできました。

夫は、大正13年生まれで、航空関係の会社に

勤めていました。徴兵され、新潟でスキーの訓練があった後、樺太に連れていかれたそうですが、航空関係の会社にいたことが功を奏したのか、飛行機の修理のため旭川に戻ったところで終戦を迎えたそうです。樺太では泥棒が多くて、大切なものは雪に埋めていたと話していました。

東京の青山に祖父の弟が住んでいて、私も小さいころよく遊びに来ていました。青山のおじいさんは、皇宮警察を勤めあげた人で、定年退職して家にいました。土浦に来るときは、たくさん勲章を付けてきました。でも、昭和20年5月の山の手の大空襲で亡くなってしまいました。

私の住む地域では、予科練の人が九州に出発する際に、5、6軒の家が食事をふるまっていました。知覧から敵地へ飛び立つ人を、ねぎらう気持ちから始めたのだと思います。



## 忘れもしない、 1945年7月28日

### 聞き取り

もりなが せつこ  
森永 節子さん  
西新宿四丁目在住  
終戦時：15歳

私は愛知県一宮市で生まれ、地元の尋常小学校に通っていました。1941年12月8日、神社の掃除当番から家に帰ったら、ラジオ放送が流れてきました。「帝国陸海軍はアメリカ真珠湾にて宣戦布告せり」と。父にこのラジオの意味を聞き、太平洋戦争が始まったことを知りました。

1942年4月、一宮市の女学校に入学しました。1年生の時は普通に授業がありましたが、軍国主義の教育のため、修身科（今の道徳）が多く厳しかったです。

1年生の半ば頃から、お百姓さん宅の若者たちが戦争にかり出されるので、留守宅の畑仕事の手伝いとして自転車に乗れる生徒は参加して、乗れない生徒は食糧増産のため、学校の校庭や中庭を耕してさつまいもやじゃがいもを植えて世話をしました。その頃、授業は月曜だけになっていました。

2年生の中頃より、学徒動員で縫製工場で働きました。私は兵隊さんたちの軍服を縫う役で、ズボンの脇を一直線に縫いました。

そうしている間にアメリカによる空襲が始まりました。ラジオから「B29が編隊を組んで進行中。名古屋方面をめがけている」と警戒警報が流れてきます。それが毎日毎日で神経が疲れます。近所

では、空襲があったときに入る防空壕を掘る家が沢山ありました。我が家も大人数ですから大きい壕を大工さんが作ってくれました。



家族写真

空襲も毎日毎日で酷い状況でしたが、物資もいよいよ底をつき、特に食糧は米、麦はほとんどなくて、ひえやあわがあるだけましな方です。油を搾った大豆のかすとか、そんな物まで食べていました。

1945年7月28日。忘れもしません。我が市もとうとう空襲を受けて焼け野原になりました。空襲警報発令とともに上から焼夷弾が雨あられと落とされて見る見るうちに家々が焼かれ、みんな防空壕に逃げ込みました。しかし、防空壕は穴に蓋を被せただけのもので、逃げ込んだ人たちはみんな

な蒸し焼きとなって死んでしまいました。私と姉は命からがら母の故郷へ逃げましたので助かりました。私たちが逃げていくのを近所の人たちは「非国民だ」と怒鳴りました。

小さかった妹や弟は田んぼの畦道<sup>あぜみち</sup>で母と震えながら夜空を見ていました。あくる朝、母から言われて我が家を見に行き<sup>あぜん</sup>て唾然としました。私の家と隣裏にある尼寺が焼かれず残っていたのです。その後、父の会社の人たちが家の中を綺麗<sup>きれい</sup>にしてくれ、当分の間、被災された方々の宿泊所になりました。依然として食糧はなくひもじい日々でした。

1945年8月6日広島、9日長崎。原子爆弾なるものが落とされて沢山<sup>たくさん</sup>の人たちが犠牲になりました。私も子ども心に日本はおしまいになる、みんな死んで日本はなくなってしまうのだと思いました。思えばこの日は私の15歳の誕生日でした。戦争なんかやめてほしいと神仏に祈りました。

同年、8月14日午前10時半頃。空からバババンと、名鉄の壊れた車両の中で生活している人たちが銃で狙い撃ちされました。私たち家族も駅に

近いので、みんな震えながら押入に入り布団をかぶ<sup>かぶ</sup>被っていました。

そして8月15日、昨日空から射撃を受けたばかりなのに、天皇陛下からお言葉があると知らされ、みんなラジオの前に集まり耳を傾けました。玉音<sup>ぎょくおん</sup>放送<sup>ほうそう</sup>でした。

私にはよくわからなくて父に意味を聞いたら、「日本は今日この戦争を終了、日本は全面的に無条件で降伏したんだ。負けたのだ」と。みんな泣いていましたが、私は一人手を上げて万歳しました。父に窘め<sup>たしな</sup>られました。みんな内心ではほっとしたことと思います。

本当に、もう戦争はいやですね。



思い出のアルバム



子どもの頃の写真



## 私の戦争体験記

### 聞き取り

やべ しょうじ  
矢屏 昭治さん  
西新宿四丁目在住  
終戦時：15歳

私は農家の生まれで、両親とともに千葉県佐原市に住んでいました。同級生には海軍や陸軍に志願した者も、中には特攻隊員になった者もいましたが、私のように体の小さい人は入隊を望むこともできません。

中学3年生の時、学徒動員で平塚の海軍火薬廠へ行くこととなりました。火薬廠で働く大人たちが出征してしまい、人手がなくなったため、私の学年全体が学徒動員にかり出されたのです。

ある日、平塚が空襲の標的となりました。何十機ものアメリカ軍の飛行機が、平塚の上空を、まるで自分のものかのように飛び回り、バラバラバラと焼夷弾を落としていきます。平塚は一瞬で火の海となりました。みんな必死に防空壕や大木の下に逃げますが、爆弾は防空壕も何もかも突き破って我々を襲ってきます。あんなに恐ろしいことはありません。空襲が止んでも、3日も4日も火は消えず、私が働いていた火薬廠も焼け落ちてしまいました。

何とか生き延びた私や他の学生は、焼け野原の中で防空壕を探し、亡くなった人を引き上げて、町中を歩き回りました。亡くなった子どもを引き上げ、それを見た母親が泣き崩れていく姿は、本当に辛いものでした。

終戦を迎え、私は田舎の佐原市に帰りました。そのうち、出征した兄が死んだという知らせを受けました。遺骨もなく、兄の帽子だけが戻ってきました。兄の出征の日を思い出します。村中の人々が駅に集まって旗を振ったり手を叩いたり、万歳で兄を送り出していました。私も自慢の兄を「お国のために頑張って」と見送りました。今、あの時に帰れと言われても、当時の気持ちには帰れないです。戦争以外の、アメリカを倒すこと以外の、



気持ちが当時はなかったのです。母は死んだ兄の帽子を握りしめて泣いていました。当時の母の気持ちを思うと言葉になりません。

この歳になって伝えたいことは、ただただ、戦争だけはしてはいけないということです。



## 引き揚げの生活

### 寄稿

すどう すみこ  
 首藤 純子さん  
 内藤町在住  
 終戦時：16歳

私が経験した戦中戦後の混乱期、特に満州から引き揚げ後の生活は、忘れられない記憶として残っています。今回は、その頃のささやかな日常のエピソードをお話します。

昭和17年の夏、私は新京（満州国）から帰国しました。都心は空襲の危険があったため、小田急線の成城学園前に住みました。満州にいた頃は、母も外出時に長い毛皮のコートを着ていたのに、東京に来てみれば、家の中が火鉢ひとつくらいしか暖房がなく、本当に寒かったです。台所は外に屋根のついた竈がありました。家の中にもガス台はあったと思いますが、人数が多いから外で炊事して、冬は長い毛皮のコートがあつて良かったと言っていました。でも泥棒に入られたのです。満州から筆筒を持って帰ることができなかったので、大切なものは革のスーツケースにしまって、それを応接間に10段ぐらい積み上げていました。ある朝起きてみたら母の着物とか、父のマントで仕立て直してもらったコート等、めぼしい物は全部持っていかれ、泣くに泣けなかったです。せっかく作ってもらったカーキ色のコートが無くなっていたのには本当にがっかりしました。

米粒ひとつさえ手に入れるのが大変だったので、華やかな柄の着物一枚で、登戸辺りの農家で

さつま芋何本かに換えてもらうこともありました。ヤミ米も買えないし、栃木の方まで買い出しに行っても全く手に入らない。結局、代用品として大豆などを食べてましたね。



満州の自宅



満州から引き揚げ後、成城学園前の自宅

辛い、家の庭がとても広がったので、自分たちで何か作ろうということになったんです。でもね、野菜なんて作ったことがないから、かぼちゃの種を蒔いてみても小さくて、今振り返ると、あれほどの食糧難の中で、よく生き延びられたと思います。

満州<sup>まんしゅう</sup>から帰国して、父に「私はどこの学校に行くのでしょう」と聞いたら「もう決めてある。ここから学校まで歩けるよ」って一度歩かされました。それが、桐朋学園の前身の山水高等女学校でした。満州<sup>まんしゅう</sup>は涼しいけど、東京は暑くて、通学路の農家で飼われている牛や馬の横を通るのが嫌で、私はわざわざ遠回りして電車に乗っていました。妹も終戦の前の年に入学したんですけど、ゲタで45分ぐらい友達と歩いていましたね。制服はスフという全国標準服で通学していました。昭和19年になると5年生から勤労働員<sup>きんろうどういん</sup>が開始され、工場に行った人は大変だったみたいです。戦争中は本当に勉強なんて全然できなくて、英語も途中でしなかったし、薙刀<sup>なぎなた</sup>や防空壕訓練<sup>ぼうくうごう</sup>の授業とかで、なんのために学費払ってたのかしらと思いました。4年で大学受験できますが、父が戦死したのがわかり、結局5年生には上がりませんでした。籍はあったようで5年卒になっています。父が生きてたら大学に行けたのにと思いました。



白菊小学校・昭和13年(満州)



敷島中学校の  
生徒手帳(満州)

敷島中学校の  
入学許可証(満州)



## 戦争と私 ～引揚者として暮らして

寄稿

なかやま  
中山 ヤエさん  
西早稲田三丁目在住  
終戦時：13歳

私は昭和7年3月生まれで、今年93歳になりました。戦争についての記憶はあまりありませんが、戦争の前は樺太で馬鈴薯農家をして家族6人で平穩に暮らしていました。

終戦後、勤の鋭い母が、「今、日本に帰らないと二度と生きて母国に帰れないかもしれない」と言い出したので、急遽、引揚船に乗り、日本に帰国することになりました。母に「一番好きで、高い服を着て」と言われたので、「ああ、戦争に負けたし、私もきっと殺されるんだ」と思ったことを覚えています。

樺太から引揚船に乗り、5日後に何とか北海道の小樽へ上陸しました。私は船酔いがひどく、港に着いたときに家族とはぐれてしまい、町で銃を持っていたアメリカ人に目を付けられました。何歳か、と聞かれたようなので13歳と答えましたが、私があまりに小さく、具合が悪そうなためか、銃を向けられることはなく、仲間と話して、そのまま去って行ってしまいました。その時、アメリカ人にもいい人がいるんだ、と思ったものです。

それから、母の生家のあった青森へ向かいました。しかし、引揚者のためお金もなく、遠縁の家の軒先にわらを敷いて、しばらく暮らしました。食べ物もないので、かぼちゃの茎の皮をむいて湯がいて食べていました。ほかにも毒の無い野菜の茎や葉、山菜などを取って食べました。父がどこ

からか、メリケン粉のようなものを手に入れ、みんなで団子を作って、売り歩きましたが、まずかったのか、全然売れませんでした。

樺太から引き揚げる前のことですが、戦争が終わったにもかかわらず、まだ空襲が続いていて、私は防空壕を掘られました。空襲警報が鳴った時に、自分で掘った穴に入ろうと防空壕へ行ってみると、すでに村の人たちでいっぱい、中に入ることはできませんでした。そこに入っていたのは、まったく穴を掘ってもいない人たちばかりでした。

しかし、もしも中に避難できたとしても、穴は浅いし、天井はベニア板1枚に土をかぶせて作った、名ばかりの防空壕でした。爆弾が落ちたら助からないとは思いますが、自分で掘った防空壕にも入れてもらえず、何のために苦勞して穴を掘ったのかと悲しい気持ちになりました。

それから両親、兄、2人の姉たちと生き延び、農家の小作をしながら、なんとか人並みに暮らしてきましたが、今は長生きできた末っ子の私一人だけとなりました。

現在は東京の娘の家で幸せに暮らしています。孫3人とひ孫2人には、絶対に私のような辛い目にあってほしくない。いつまでも戦争のない平和な世界であってほしいと祈りながら生きております。

## 寄稿

江口 太助さん  
 上落合二丁目在住  
 終戦時：12歳

# 原子記録 旧制中学校1年生の記録

昭和20年、旧制中学校1年生として福岡県立柳河中学校に合格して入学。当時は農村地域として通学路の両サイドは麦畑、菜の花畑、レンゲ畑等で美しい景色。毎日行き帰り見て楽しみ。戦時中のごことで食糧が不足ぎみで食べるものがほとんどなく、通学生は弁当なし状態でした。皆様栄養不足だったと思います。

その夏休み、出校日は全員生徒に決められた。僕の場合は8月9日、この日は気温が朝から28度あり、昼頃は30度以上だったと覚えています。学校の窓ガラスが反射して敵の飛行機の目標になるのでガラスにセメント、砂、水を混ぜ合せ窓ガラスに塗る作業を行っていた時、すごい地震が起きたように校舎がゆれました。と、その時、「地震が来た」と誰かわかりませんが叫んだのです。急いで下の方へ逃げました。

それは長崎原爆の爆風だったのです。

その直後、南西方面の空にアドバルンのような大きい雲が、何kmも離れた所からも中心部が薄い、まるでピンクの動物でもいる様な動きでうずを巻いているのが見えます。その外は薄いグレーが何かを囲む様な動きで、外端が黒い雲がひときわ大きくもくもくとこのぼって動いているのが遠く

からも見えたことと思います。

生徒たちは学校の2階より約20分～30分思いに見ていました。その1日か2日後か判らないが風船爆弾とわかりました。真夏の空に風もなく爆破した物を見ることができました。学生時代のことが今日まで80年間忘れることができず、良いか悪いか子どもの頃の強い印象が頭にこびりついています。

長崎市内まで柳川市より60kmあります。うち有明海が30kmあり、柳川市よりも高い建物がなく天気も良きはっきりと見えたものだったな一と思います。その後、何日かするとSL機関車が貨物車5台を引いて、佐賀線を福岡瀬高まで行くのですが、この貨物車には長崎原爆被害者が沢山乗っていました。皆様身に白い軟膏を付けてようやく歩く人、すわりこむ人、寝ころがる人、子どもをおんぶ、抱っこする人、駅のホームは多くの人でいっぱい皆様水、水、水を求めて、くれくれと叫び強く求めて、白い軟膏で最後の生きる於母影を見て、私の頭から離れることができません。今でもそうです。安らかにやすみくださいと言って家の仏様に毎日水と線香をたいてお参りしています。



## 学生時代の戦争の記憶

### 聞き取り

後藤 佐吉さん  
四谷三栄町在住  
終戦時：20歳

昭和17年、熊本の第五高等学校に入学したころは、寮生活をしながら蹴球に打ち込んでいました。昭和19年4月から進学を目指して勉学に努めようとした矢先、高等学校は9月切り上げの卒業となり、長崎の三菱造船所<sup>さんりょうぼうし</sup>で勤労奉仕することになりました。19年5月から8月下旬までの3か月間、三菱造船所<sup>さんりょうぼうし</sup>での勤労奉仕は、リベット工をさせられました。2,000トンぐらいの大型船で、クレーンで運ばれてくる鉄板をボルトナットで仮締めする仕事でした。狭い船台の木の板の上でハンマーを振るうこともありましたが、事故なく無事勤労奉仕<sup>きんろうほうし</sup>を終えました。

6月には満20歳を待たずの繰り上げ徴兵<sup>ちやうへい</sup>検査の知らせが届きました。第1乙種合格でしたが、理工系であったため、すぐに兵役にはつかず、第1希望の東京帝国大学工学部鉱山及び冶金<sup>やきん</sup>学科に入学しました。入学式で当時の工学部長が「君たち工学部の学生は、兵役延長のためこうして勉学することができるが、やがて召集<sup>しやうしゅう</sup>されるその日まで勉学に励んでもらいたい。」という挨拶が思い出されます。入学後、いずれ徴兵<sup>ちやうへい</sup>、軍務につかねばならない時代であるからと、海軍委託学生に応募しました。しばらくして呉<sup>くれ</sup>の海軍工廠<sup>こうしやう</sup>で製鋼の実務を学ぶように命令されました。大学の講義を飛

び越しての現場主義にびっくりすると同時に我々幹部候補生への期待が大きいことも感じました。

昭和19年暮れまでは、まだ東京への空襲がなく、工学の基礎となる数学、力学、応用物理学及び実験などが行われていました。昭和20年に入るとB29による東京への爆撃が始まりました。最初のころは、軍需工場、倉庫などが狙われたようでしたが、住宅地への無差別焼夷弾<sup>しやういだん</sup>爆撃に変わってきました。B29の侵入による警戒警報<sup>けいかいけいほう</sup>発令は、短時間とはいえ毎日のような日々でした。私は焼け出されませんでした。1回、2回と焼け出されたものもありました。被災した教授の家の後片付けを手伝ったとき多数の日本刀が焼けたのを見て、改めて空襲のひどさを実感しました。このような状況でも講義、実験は行われました。真の戦況はまともに知らされることもなく、皇国のため、軍需品生産に寄与できるよう一生懸命勉学に励んでいました。

故郷の浜松<sup>はままつ</sup>には、飛行聯隊<sup>れんたい</sup>、高射砲聯隊<sup>こうしやほうれんたい</sup>、これらの部品・製造工場があったため、再三にわたり空襲を受けました。実家の家族の疎開<sup>そかい</sup>が決まり、応援のために出かけた6月18日の夜、浜松<sup>はままつ</sup>が大空襲を受けました。家族は既に疎開先<sup>そかい</sup>に移動後で、私一人が実家に留<sup>とど</sup>まっていたため、まともに空襲

を受けました。爆弾の音に数時間脅かされましたが、幸い被害を免れました。この<sup>はまつ</sup>浜松大空襲により、<sup>はまつ</sup>浜松の中心部はほとんど焼け落ちました。その後も<sup>はまつ</sup>浜松は再度にわたり空襲を受けたため、家族はさらに離れた<sup>えんしゅうもりまち</sup>遠州森町近くの<sup>そかい</sup>田舎へ疎開しました。兄はこの間、丙種不合格であったにもかかわらず、<sup>ちやうへい</sup>徴兵され九州方面に派遣されていました。私は一旦東京の学業に戻りましたが、8月につかの間の休講を利用し、<sup>そかい</sup>疎開先の家族の応援に出かけました。この短い期間に、ソ連の参戦、広島・長崎への新型爆弾投下、そして終戦を迎えました。

私も<sup>もりまち</sup>森町の<sup>ぎよくおんほうそう</sup>田舎で玉音放送を聞き、全く驚愕したことを覚えています。「<sup>しんこく</sup>神国日本は本土決戦で勝ち抜く」という政府の発表を、信じ切っていた大多数の国民にとっては、<sup>へきれき</sup>青天の霹靂の<sup>ぎよくおんほうそう</sup>玉音放送でした。しかし、もしもこの<sup>ぎよくおんほうそう</sup>玉音放送が1週間延びていたら、どれだけの被害が広がったか。さらなる原子爆弾、空襲による死者、被災者は何十万人を超えたことでしょうか。敵軍の本土上陸による合戦で、私自身も存在しなかったでしょう。まさに、<sup>ぎよくおんほうそう</sup>玉音放送は当時の日本に吹いた神風であったと私には思えます。

戦時・戦後の暮らし



## 戦争で諦めた進学

### 聞き取り

<sup>みょうが れい</sup>  
眞賀 令さん  
西新宿四丁目在住  
終戦時：18歳

私の故郷は宮城県<sup>とめぐんうわぬまむら</sup>登米郡上沼村（現<sup>とめしなただ</sup>登米市中田町）です。農業が盛んな場所でした。父母はどちらも教育関係の職業をしていましたが、私の家も農地を持っていました。

戦争当時、私は<sup>とめ</sup>登米高等女学校に通ってました。女学校2年生までは、普通に授業を受けることができ、教科に英語もありました。しかし、3

年生に上がってからはガラッと空気が変わり、私を取り巻く環境も軍事色が強くなりました。英語の授業は廃止になり、体育の時間は<sup>なぎなた</sup>薙刀の練習をするようになりました。自分で作ったもんぺをはいて、上にセーラー服を着て登校しました。

授業を受けるよりも、農家のお手伝いをするのが多くなりました。大人たちが戦地に行ってい

まい、農家の働き手がいなくなってしまったからです。家業が農家ではない私にとっては慣れない作業ばかりで苦労しました。

戦地の兵隊に送るために、手ぬぐいで慰問袋を作ったり、出征する兵士に渡す千人針せんになはりを作ることもありました。戦争一色で、反対すると捕まるような時代でした。

田舎の方でも空襲の危険がありました。北上川きたかみがわという川の橋を狙ってB29が爆弾を落とすのです。いつも防空頭巾を肩にかけて生活していましたが、気休めでしかありませんでした。

18歳で女学校を卒業し、その後は仙台せんだいの学校に進学する予定でし

た。試験にも受かっていましたが、当時仙台せんだいは空襲がひどく、上沼村うわぬまむらからも仙台せんだいに焼夷弾しょういだんが落ちる様子が見えていました。そのような状況で、娘を心配した両親の反対もあり進学を諦めました。



女学校時代

卒業後は、何か職に就いていないと関東の方の工場へ動員させられてしまうので、役場で働きました。私の友人たちも田舎にいるために、臨時で教師の職に就く者が何人もいました。

終戦後、宮城で働きながら、皇居の焼け跡を整理するための勤労奉仕きんろうほうしで東京に出ることもありました。食べるものが不足していた中、宮城にもアメリカの駐留軍ちゅうりゅうぐんが来て、田舎の役場にも配給があり、軍人の食糧を分けてくれたこともありました。その時、やっぱり人間は人間、人種は違うけれど助け合いができるんだと思いました。

23歳まで宮城で過ごし、結婚を機に東京に住み始めました。移り住んだ東京の町は焼け野原で、住まいのある西新宿にししんじゅくから中野なかのの方までずっと見え



皇居勤労奉仕

たほどです。東京に出てきてからの方が、生活は苦しかったです。田舎にいるうちは食べ物に困ることは少なかったのですが、東京の配給は本当に少なく大変でした。お米が足りないので、大根など野菜を刻んで入れて食べていました。火の元もなかったのに、鉄関係の仕事をする夫のツテでもらったコークスで、火を起こし、1日分の食事を全部作りました。1日に1回しか火を起こせなかったのに、消えたらおしまいです。作ったご飯は時間がたって冷めないように布団に包んでいました。

子どもが生まれてからも戦後の貧しい時代を過ごしました。子どものおむつも配給がありましたが、浴衣つはを継ぎ接ぎして作ったもので、使うのに躊躇ちゅうちよするようなものでした。

女学生の時代から苦しい日々を経験し、戦争はもう二度と起きてほしくないと強く思います。



小学校卒業写真



当時のアルバム



## 聞き取り

ほりこし みえこ  
堀越 美枝子さん  
北新宿三丁目在住  
終戦時：8歳



## 聞き取り

もり た  
森田 やすさん  
北新宿一丁目在住  
終戦時：13歳

ただただ<sup>あんど</sup>安堵した終戦の知らせ

私は新潟県<sup>みよこうし</sup>妙高市出身です。戦争が始まり、最初のころは想像もしていませんでしたが、私が小学校に入学してそのうち、妙高も<sup>きょうこう</sup>厳しい状況になっていきました。町会からの命令で、みんな自宅に<sup>ぼうくうこう</sup>防空壕を掘りました。空襲警報が<sup>くうしゅうけいほう</sup>発令され、サイレンが鳴り、「妙高の上空にB29現れる。」なんてラジオで流れてくると、とても怖かったです。

小学校では日常的に、<sup>くうしゅうけいほう</sup>空襲警報が鳴ったときの訓練をしていました。6年生が<sup>くわう</sup>班長になって、空襲警報が鳴ったら、班長を先頭に<sup>しゅうけいほう</sup>集団になって家に帰るんです。実際にそうやって家に帰されるのが何度もありました。

「戦争が終わったんだよ。」と親から言われたときは「ああ、よかった。」とただただ<sup>あんど</sup>安堵しました。

終戦後のことですが、「<sup>しんちゆうぐん</sup>進駐軍の兵隊が来ても、何も物をもってはいけないよ」と周りの大人から言われていました。実際に会うと、アメリカ軍の兵隊は大きい人たちがばかりで圧倒されましたが、優しい笑顔を見て、少し安心したことを覚えています。

「戦争は絶対にやってはならない。」と声を大にしたいです。何にもプラスになることはありません。悲しみだけです。世界が仲良くしてほしいと切に願います。

## 防空頭巾をいつもそばに置いて

私は山形出身ですが、堀越さんと同じように、空襲で怖い思いをたくさんしました。当時の普段着は着物でしたが、戦争が始まると着物でもんぺを作ってそれを着るようになりました。いつも防空頭巾をそばに置いておいて、警報が鳴ったら<sup>かぶ</sup>被ってすぐ逃げられるようにしていました。

戦争当時、私は小学校6年生～中学生でした。体育の時間は額に白い鉢巻をつけて、敬礼から始まり、<sup>なぎなた</sup>薙刀の練習をしました。空襲警報が解除されると、学校の時間にも<sup>くうしゅうけいほう</sup>豆まきの仕事をしました。そんな環境だったので、勉強をする時間はあまりありませんでした。食糧難もあり、食べ物がかぼちゃやじゃがいもが多かったので、配給でもらったバターには本当に感動しました。お米にバターを溶かしてお<sup>しょうゆ</sup>醤油かけて、それがとても<sup>おい</sup>美味しかった記憶があります。私の2人の姉は、山形の銀行員でしたが、戦争中は<sup>かわさき</sup>川崎に動員され、<sup>か</sup>住み込みで働きに出ていました。姉の1人が「好きな人がいたのよ。でも戦争が始まって、どこにいるかわからないし探しようがない。」と言っていたのを思い出します。私たちの世代はその頃ちょうど思春期でしたので、そのような思いもありました。そんな中でしたが、ご縁というものが、思いがけない形で訪れました。山形へ<sup>そかい</sup>疎開に来たご家族の息子さんが、東京で国鉄の運転士をしていたのですが、私はその方と結婚することになりました。それから東京に出てきて、今まで暮らしています。

## 寄稿

いけなが たまこ  
池永 珠子さん  
中落合四丁目在住  
終戦時：11歳

## 子どもの戦争体験

戦争の光景を初めて見たのは、<sup>おちあい</sup>落合第三小学校5年生の時、<sup>がくどうそかい</sup>学童疎開から<sup>えんこそかい</sup>縁故疎開に切り替えるため、一時、<sup>なかおちあい</sup>中落合の家に帰って来ていた時です。

その日、<sup>けいかいけいほう</sup>警戒警報から切り替わった<sup>くうしゅうけいほう</sup>空襲警報に促され、<sup>かぶ</sup>防空頭巾を被りリュックを背負い指定されていた<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕に急ぎました。空には前方を左から右へとB29編隊の銀色の巨大な姿が見えました。その日はあの下町の東京大空襲でした。

4月、6年生になり秋田に<sup>えんこそかい</sup>縁故疎開し、空襲もなく、その年8月終戦。11月に父が迎えに来て私と上の弟、妹とで東京に戻りました。山手線が<sup>す</sup>巣鴨駅に停車すると駅前には焼け野原。本当に驚きました。私の家は変わらず残っていました。あたりは今よりずっとたくさんの緑があり、小野田の森など屋敷林に囲まれ爆弾投下がなく焼けなかったのです。その時のほっとしたことと、さっき見た焼け野原の光景とで「戦争とはこういうことなんだ」との思いは忘れることができません。

私の父は、<sup>とやまがはら</sup>戸山ヶ原の陸軍技術本部付属科学研究所に勤めていました。<sup>こうしゃほう</sup>高射砲等兵器の設計図の研究をしていました。飛来したB29のはるか下方で炸裂し、敵機を撃ち落とすことができない<sup>こうしゃ</sup>高射砲を見て「あれでは仕方がないなあ」と子ども心にも冷めた感情を持ったものです。その後、父た

ちのグループはもっと高度な兵器の研究を進めていたようですが完成前に終戦を迎えました。

翌年、私は近くの<sup>めじろ</sup>目白学園が女子を受け入れたので入学。<sup>めじろ</sup>目白学園の森が爆撃から校舎を守ってくれたのです。2年後、新制中学が<sup>めじろ</sup>目白学園内に開校しました。

母は8月11日に生まれた赤児と3歳の弟と秋田に残っていました。東京は大変な食糧難で時々支給されるさつまいもはご馳走でした。私は食べさせてもらえる物は何でも食べなければ生きてゆけないと妹や弟にも言い聞かせました。母は友人の便りで東京へ帰った3人の子どもたちの強度の栄養失調を知り、2人の幼子と共に<sup>ちそう</sup>おむつ入れや袋に米や卵等を詰め込み、帰ってきてくれました。その夜、母は真っ白な御飯を炊き、真っ黄色な卵焼きを作り、私たちに食べさせてくれました。その後母は友人とリュックに自分の着物や帯等を詰め、近隣の農家を訪ねて米や食糧に替え、5人の子どもを守り育ててくれました。母と子どもたちが生きてゆくための戦いでした。

父は「二度と人を殺す兵器の設計図は作らない」と職探しを始めました。日本中の大人も子どもも平和な明日に向かってしっかり歩み始めたように思いました。



## 戦争を言葉だけで伝えるのは難しい

### 聞き取り

えのもと まさかず  
榎本 雅一さん  
北新宿四丁目在住  
終戦時：11歳

昭和16年、私が小学校に入学したその年の12月8日に日本軍が真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まった。日本が優勢だったのも一時で、昭和18年頃から戦況は悪化していった。

戦況が悪化するにつれ、東京は空襲で危ないかと疎開が始まった。両親の田舎がある者は親戚の家に疎開していったが、私の両親は東京の生まれだったので、東京に残ることとなった。

昭和20年3月10日、東京大空襲。続けて3月25日の空襲にあい、私の住む北新宿の町は一面、焼け野原に変わってしまった。町民は皆、戸山ヶ原の陸軍技術本部（現在の百人町あたり）近くの山へ逃げた。山の上から自分たちの町が焼けていくのをただ眺めているしかなかった。家は焼け落ち、防空壕も焼け、住むところを失った私は、両親と離れ、草津温泉へ学童疎開に行くこととなった。疎開先は旅館だったので、良いものが食べられるかと期待したが、そんなことはなく、唯一良かったと言えるのは、温泉地だったのでお風呂に入れたことくらいだ。両親と会えない日々はとても辛く、苦しい生活で、中には脱走する者もいた。それでも「お国のため、お国のため」と、まだ小さい体で、重いレンガを山2つ越えて運んだり、懸命に日々を過ごしていた。

終戦後、東京に戻ってからは焼跡の片づけに日夜励んだ。学校を再開するにも、まずは足元を綺麗にするところから。当時は家がないので阿佐ヶ谷の親戚宅に住まわせてもらい、その後、掘り立て小屋の家ができて、北新宿の地に戻ることができた。

食べるものも乏しく、お金があっても何も買えない、もどかしい時代だった。

当時、私はまだ子どもで、青春時代も恋愛も戦争に奪われた自分より上の世代から見たら、もっと違うように見えていただろう。年代によって戦争に対する考え方は異なるし、終戦前と終戦後でも変わる。戦争が終わってからは、見えるものが広がり、知識も広がったように思う。

戦争を言葉だけで伝えるのは難しい。言葉は人それぞれの角度で、捉え方が全く異なるからだ。だからこそ、当時の資料を残して後世に伝えていくことが必要だと思う。私自身も、子どもたちに資料を見せながら、戦争の記憶を伝えていきたい。



## 寄稿

わたなべ かねこ  
渡邊 金子さん  
新宿区在住  
終戦時：10歳

## ノーモア戦争

昭和16年12月8日、太平洋戦争が勃発した。当時私は国民学校（現小学校）1年生だった。住まいは本所（現墨田区）。

当初は“日本は優勢”の報道に大人たちは必勝を信じていたというのが、平和は長続きしなかった。町の様子は一変し憲兵が鋭い目つきで闊歩かつぽしていて怖かった。街灯は消えて外に灯りが漏れないように家の電気は黒い布で覆い、夜は真っ暗闇だった。土間には防空壕ぼうくうごうも掘った。鉄製品は全て供出し、逆らえば“非国民”と言われていたとか。

4年生になって夏休み前、学童疎開がくどう そかいの命が下り、私は集団疎開しゅうだん そかいではなく縁故疎開えんこ そかいを選んだ。私は祖父母の元に移り、友人たちと別れてとても悲しかった。そこは小さな山村で空襲はなかったが、ときどきB29がキーンという音を立てて山間を横切っていて、とても怖かった。

“贅沢ぜいたくは敵”

“欲しがりません 勝つまでは”

こんな言葉が飛び交う中、男性たちは出征して若い女性は町の軍事工場にかり出され、手薄になった村の中で大人も子どもも“銃後の守り”と我慢し頑張っていた。主食はフスマや豆カスの中に米粒はわずか、全て品不足の中の生活だった。

昭和20年3月10日の東京大空襲ほんじよで本所は焼け野原になり、10万人余りの死者が出た。5月25日には山の手やま て、それからあちこちに空襲が続いていた。

8月6日広島、8月9日長崎、恐ろしい原爆投下（白くて大きなキノコ雲と私たちは言っていた）。原爆は今も苦しんでいる方たちが多い。

出征した兵隊さんを送った駅は無言の帰国をされた方たちもいて、また、知人のお姉さんは軍事工場じやうごうで空爆を受けて亡くなられた。

8月15日、日本は敗戦国になった。戦争は絶対にしてはいけない。平和のありがたさを噛みしめてほしい。ノーモア戦争です。

## 聞き取り

もり た  
森田 ヤスさん  
大久保在住  
終戦時：7歳

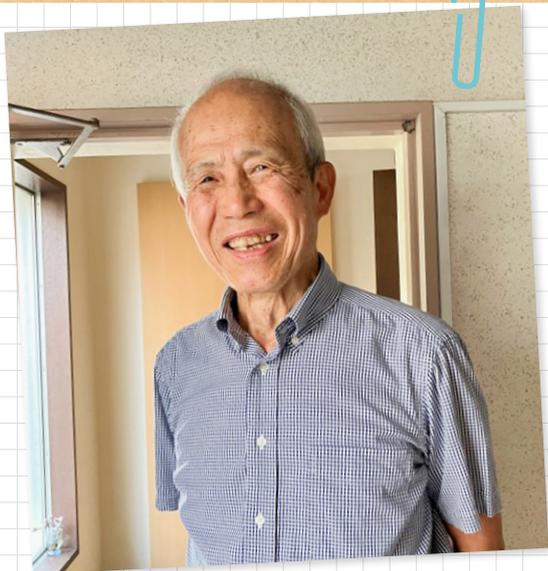
## 食べるものがなく、自給自足の生活

生家は新潟県村上市で酒造業を営んでいました。戦争で若い蔵人が一人また一人と兵役にとられ、仕事ができなくなっていき、戦争時1軒を残して廃業となりました。村上は田舎だったので、飛行機は飛んできては通り過ぎて、新潟や新発田の方へ行ったようです。空襲警報のサイレンが鳴ると、2歳の子でも頭巾をかぶって逃げました。裏庭に4畳半くらいの防空壕を作り、何度か入った覚えがあります。都会のような苦労はしていませんが、B29が怖くて、サイレンの音がとても嫌でした。

服は国防色、大日本国防婦人会は、着物からモンペを作り、防空頭巾を全員分作りました。食べるものは少なく、この小さな城下町でも、裏庭に畑を作り、野菜を育てたり、鶏を飼って卵を採る

など自給自足でした。とにかく食べるものがなく、ひもじかったと記憶しています。母の実家は、養蚕と農業をやっていたので、今思えば良かったと思います。夜間は家の光が外に漏れないよう、暗幕をはっていました。

終戦のときは、天皇陛下のラジオ放送を客間で皆かきこまって聞きました。やがて日本海から米軍が上陸し、親に女、子どもは外に出るなど言われました。家の蔵は没収され、米軍は資材や食料を運び込みました。米軍の人は、家族写真を見せてくれたり、チョコレートをくれたりしました。そのとき子どもながらに「力の差」を感じ、勝てるわけないと思いました。



## 一つひとつの食べ物が 大切でありがたいものでした

### 寄稿

きりゆう きよひと  
桐生 清人さん  
早稲田鶴巻町在住  
終戦時：6歳

私は、昭和14年生まれなので、16年から始まった戦争はあまり記憶にないのですが、空襲警報が鳴って畳を屋根にした防空壕に入った記憶が強く残っています。

昭和18年、家の前にあった映画館が軍需工場になったことに伴い、延焼防止の緩衝地帯を作るため家が壊されることになり、従業員の実家の群馬県高崎市の郊外に引っ越しました。小さな家の屋根裏での生活で、兵隊として中国に出征した父に代わり、母が私と弟や妹を育ててくれました。母は近所の農家の手伝いや着物を売り、食べ物を分けてもらったり、私は小さかったので薪拾いなどを手伝いながら何とか生活することができました。

終戦となった6歳の頃は常にお腹が空き、他人の家の畑のサツマイモやナス等を生で食べ飢えをしのぎました。また、妹は大人がヒマの実を食べるのを見て、生で食べたところ下痢を起こし、結局、大腸カタルとなって4歳で亡くなりました。今なら良い治療を受け、死ぬこともなかったと残念でなりません。

お米が大切な時ですから、食事は朝は麦が半分

入ったご飯、昼はトウモロコシで作ったパンやサツマイモ・じゃが芋等、夕食はすいとん・うどん等でした。トウモロコシのパンと言えば美味しく聞こえますが、ボソボソとしたひどいものです。ただ、当時は一つひとつの食べ物が大切でありがたいものでした。

群馬県は養蚕が盛んで近所に桑畑が沢山あり、実が熟すると竹を輪切りにしてその中に入れ棒でつついてジュースにして飲んだり、畦に生えている野蒜を摘んで食べたりと子どもながら飢えをしのいだのも忘れ難い思い出です。

遊び道具で思い出すのは、疎開先の近くにあった戦闘機訓練場の管制塔（訓練で使用していた飛行機は木製でした）を銃撃しに来たグラマン戦闘機の葉きょうです。土でピカピカに磨き腰にぶら下げていました。

戦後80年経ち、日本は平和な時代が続いています。美味しい食べ物でもなんでもいつでもに入ります。しかし、21世紀になっても地球上に戦争があちこち続いており、人間の愚かさに情けなさを覚えます。



## 私の戦争体験

### 寄稿

かじわら やすみ  
梶原 安臣さん  
愛住町在住  
終戦時：3歳

「私の戦争体験」とはいても、終戦の年4歳だった私にどれほどの記憶があるでしょう。全て母から繰り返し、繰り返し聞かされたことが幼心に断片として残り、成長の過程で反芻して記憶として確定したものだけが、今の私の脳裏から取り出すことができるのだと思います。

「戦争体験」はそれが誰のどのようなものであっても、今日では貴重で大切なものになってきています。平和を守るためにも、多くの犠牲者の霊に報いるためにも、孫子の代まで更にまた時代を超えて、悲惨な事実を語り伝えていかなければならないと思います。なぜなら、人間は過ぎたことを忘れやすい者だし、過ちを繰り返す愚かしい者であるからです。

昭和20年、激化する空襲を避けて、母は兄と私を連れて名古屋から実家のある小牧原に疎開していました。住んでいたのは、鶏小屋だった建物でした。僅かな集落の外は田圃と畑で、近くを農業用水が流れ、脇に土葬の墓地がありました。

そんな田舎にも爆撃はあって、焼夷弾が落ちてきました。母は兄を連れて防空壕代わりの井戸の中に隠れていました。空からきらきら光の粒が落ちてきました。黄燐焼夷弾と呼ばれたこの爆弾は火災を引き起こし、衣服を焦がし、皮膚に付くと

激しく爛れてしまいます。皆防空頭巾を被って、わが子の命を守るのに精一杯でした。その時私は麻疹に罹っていて、家で寝かされていたのですが、一人で這って防空壕まで来たそうです。

何処の家でも、食べ物に不自由していました。母は商売用水飴の最後の1缶を大切に保管して置いて、それで私と兄の命を繋いだと言うことです。飼っていたウサギも食べました。皮は襟巻きや耳当てになりました。鯉幟も解いて布団の生地になりました。何処の子も栄養不足で体中吹き出物だらけでした。薬というものはありません。私の掌も崩れて包帯を解くと骨がむき出しになって見えたそうです。今でも左手の甲に痕跡があります。

名古屋の街が夜間空襲で真っ赤に燃え上がる様子を、幼い記憶に留めていた兄は「名古屋の方角を見ると焼ける炎で真昼のように明るかった」と戦時中の話の度に、いつも言っていました。

父は応召で海軍に入り、暫く広島島の呉に居て巡洋艦の矢矧に乗っていましたが、終戦の時は知多半島の河和と云う所の教育隊にいたので、割方早く復員できたのでした。父の復員を待って、一家は名古屋にまた戻ることになりました。

一面の焼け野原になった名古屋の街にも、夜になるとほの暗い電灯の明かりがぽつん、ぽつんと

とも  
灯りました。それは人々の心をほっとさせる平和  
の灯火でした。

一つとも  
灯った灯りの下、ちゃぶ台を囲んでわず僅かな  
食べ物を分け合って食べた家族のだんらん団欒、今でもあ  
れが私にとって大切な、大切な家族の原風景と  
なっています。

食べるものが全てであった時代、しかもやっと  
食べられた時代、あの時代があったからこそ今の  
自分がこうであるのだということを強く感じま  
す。そして今更ながら父母の苦勞に思いを馳せて、  
あふれる感謝の気持ちでいっぱいになります。

